法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

# 仮面の奇人 ： マニラにおける陸軍報道班員 三木清

宮永, 孝 / MIYANAGA, Takashi

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
社会志林 / Hosei journal of sociology and social sciences
(巻 / Volume)
70
(号 / Number)
3
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
56
(発行年 / Year)
2023-12
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030537

# 仮面の奇人
## ――マニラにおける陸軍報道班員　三木　清

宮永　孝

はじめに
一　三木　清　徴用通知をうけとる
二　輸送船「崑山丸」でフィリピンへ
三　報道班員　三木　清
四　部屋にこもった三木　清
　　と同輩との確執
五　三木　清のフィリピン研究
むすび
　　軍政下のマニラ地図
　　大阪毎日新聞の特派員・木村　毅の
　　マニラ報告
　　三木　清の偽装術
英文レジュメ（Abstract in English）

**はじめに**

三木　清（一八九七～一九四五、大正・昭和期の哲学者、評論家。治安維持法違反により検挙され、法大を追われる。豊多摩刑務所で獄死）は、生前小林　勇（いさむ）（一九〇三～八一、昭和期の出版人・エッセイスト、岩波書店社員。横浜事件で逮捕された）によくこんなことをいっていた。

――（太平洋）戦争がおわったとき、お互い無事にあえたらしあわせだ。生きぬくということだけでも容易ではない。こうしてしょっちゅう会うのも、じきに終るかもしれない。数年ののち、やあ生きていたかと、お互いいえれば幸福というものだ。

三木　清のことを知る者は、かげでかれのことをからかって「ミキセイ」と呼んでいた。空襲が激化し、わが国が断末魔の苦痛を味っていた昭

和二十年（一九四五）三月二十八日の午前十時ごろ、三木は小林と岩波書店の二階で話をしていた。話の途中、小林がちょっとよそを向いていると、三木が肩をたたいた。

ふり返ると、かれのそばに戦闘帽をかぶった男が二人立っていた。三木は落ちついた声でいった。

――警視庁から来たのだ。

――何か用事はないか。

と小林がきいた。

――小供（洋子）のことをたのむ……。

と、三木は一言いった。ついで二人の男に、自動車をもって来たのか、と尋ねると、そうでないと素っ気ない返事がかえった。三木は白いカバンを外とうの上から肩にかけると、連れの男らと階段をおりていった。小林は二階の窓から、三木が二人の男に左右をまもられながら、街から姿を消してゆくのをみていた。小林にとって、これが三木との今生の別れとなった（小林　勇「孤独のひと――三木　清の一周忌に」）。

注・三木は警視庁から逃亡した高倉テル（一八九一～一九八六、大正・昭和期の社会運動家。終戦後、参院議員、のちGHQから追放された）を一晩自宅に泊め、「ミキ」といった名前入りのワイシャツをあたえた。三木は容疑者を保護逃亡させた嫌疑で検挙された（犯人蔵匿［かくしたこと］を問われたもの）。

生前、三木は小林に広言を吐いた。じぶんはうんと仕事をし、本を一間（約一・八メートル）くらい書くのだと。残された生涯において、できるだけ仕事をし、それを土産に、亡くなった妻に、待たせたね、といってあとを追うつもりだ、と。しかし、三木は遠大な志しを宿しながら、大望を果たすことなく、獄死した。かれは獄中において疥せん病（伝染性の皮ふ病）にかかり、苦しさのあまり、独房の寝台から汚物にまみれた床のうえに転げおちて死んだのである。

小林によると、三木は物ごとに対する見通しが早かったという。将来をいちはやく見抜く力――いわゆる先見の明があったらしい。独ソ戦がはじまるころ、「ヒトラーは自殺する。近衛には剣難の相（はものでで殺傷される災難）がある」と、折あるごとに大声でいっていた。戦局が悪化し、敗色が濃くなるころ、大勢のまえで「いまから英語を一生懸命やっておかぬと間に合わぬぞ」と平気でいったりした。じっさい三木の予見はほぼ

的中した。

ヒトラーはベルリンが陥落するまえに、愛人のエヴァ・ブラウンと自殺し、近衛は終戦後、ＧＨＱから戦犯として訴追されたとき服毒自殺した。英語は日本が戦いに破れ、占領軍が上陸してくると必須となり、わが国に英会話熱がおこった。

法政を追われた三木は、おもに新聞や雑誌に原稿をかき、ときに講演をやり、糊口をしのいでいた。ほかに一、二の出版社から顧問料が入り、またときどき講演収入があった。

わが国は昭和十六年（一九四一）十二月八日――ハワイ・オアフ島の真珠湾に停泊中の米国の太平洋艦隊を急襲することによって、太平洋戦争へと突入した。日米開戦の年暮れの一日――東大にちかい湯島の居酒屋である忘年会がひらかれ、そこに物書きや教師、出版関係のひとびとがあつまった。が、そのあつまりは、いっこうに気勢のあがらぬものであり、お通夜のように沈うつな空気が支配していた。

出席者は、つぎの人びとである。

清水幾太郎（一九〇七～八八、昭和期の社会学者・評論家。当時、文化学院教授。戦後、学習院大教授）
三木　清（一八九七～一九四五、昭和期の哲学者・評論家）
中島健蔵（一九〇三～七九、昭和期の評論家）
豊島与志雄（一八九〇～一九五五、大正・昭和期の小説家。当時、法大教授）
粟田賢三（一九〇〇～八七、私立武蔵高教授をへて岩波書店編集員）
小林　勇（一九〇三～八一、岩波書店編集員）

その原因は、日米開戦にあったほか、十一月ごろから、周囲の知識人がつぎつぎと徴用され（国家の命により、強制的に特定のしごとにつかせる意）、南方（南のほうにある国）に遣られることにあった。

「昭和研究会」（昭和8～同15年までつづいた国策研究機関）は、軍部や右翼から自由主義的、左傾的とみられ、それとかかわりがあった清水・

三木・中島らにも、徴用の手がのびる可能性があり、この三人はよくそれを話題にした。清水がわれわれも徴用されるかな、といえば、三木はそんなバカなことがあるものか、と否定する。中島も三木に同調し、そんなことはありえない、といって調子をあわせた。

文学者（詩人、作家、文芸評論家）の徴用がはじまったのは、昭和十六年（一九四一）の十一月初頭から年末にかけてのことであった。この徴用は何を目当てになされたものかさっぱりわからなかった。徴用をうけた者の中には、かなり左翼的な、また自由主義ぽい作家らがふくまれていたから、じっさいは「徴用」ではなく「懲用」（こらしめのための召集の意）であろうと考えた者もいた（巌谷大四「威風堂々　大東亜文学者大会――非常時　日本文壇史(一)」）。

清水も三木も中島も、おれたちは徴用されない、と高をくくっていたが、その後果たせるかな、かれらのもとに、国民徴用令による動員令――軍への徴用通知――いわゆる「白紙」がつぎつぎと届いた。「赤紙」は兵士として軍へ召集される令状とすれば、白紙は軍の後方勤務――前線のうしろで文化事業をやらせるための召集であった。

日米が戦端をひらく一年まえの昭和十五年（一九四〇）、「内閣情報局」（情報局ともいう）が設置された。これは政府の情報活動や宣伝をやる機関であり、ほかに新聞・雑誌・書籍などの文化統制（検閲）をおこなう組織であった。昭和十六年（一九四一）の春のある日のこと、中島健蔵のもとにある雑誌編集者が、ただならぬ顔つきでやってきた。その者の話によると、ある文学者が、文士のブラック・リスト（要注意人物の氏名一覧表）を情報局へ提出したというのである。

――これがその写しです。

といい、ザラ紙の原稿紙に走りがきした名簿をだしてみせた。

秘かに写しとったその用紙には、およそ執筆者として知られている者の名が、ほとんど全員かきつらねてあった。しかも氏名のうえに奇妙な丸いしるしが付いていた。○（白丸）●（黒丸）◑（半黒丸）の三種類である。中島は思わずじぶんの名をさがした。かれの名はあった。◑（半黒丸）である（中島健蔵「ブラック・リスト」『昭和時代』岩波新書所収、昭和32・5、一四七頁）。

このリストを提出したと考えられる者の名もあったが、それは○（白丸）であった。中島によると、その者は、雑誌の編集長あてに他人の〝時局認識〟について、中傷の手紙を送りつける人物であったという。ブラック・リストをつくり、徴用を進言したと考えられる者はだれであったのか、いま

も謎のまゝだが、巌谷にはだいたいの目安はついていた。けれど確証がなかった。

当時、思想の告発者、摘発者として有名であったのは、蓑田胸喜（一八九四～一九四六、昭和期の国家主義者。皇室中心主義を奉じ、共産主義、自由主義を排撃し、多くの文化人が歯牙にかゝった。終戦の翌年自殺）であった。極右であったかれは、機関誌『原理日本』において、国家を毒するものと考えられる人物を盛んにやりだまにあげた（非難攻撃の対象とした）。その中には三木もふくまれていた。

巌谷は、ブラック・リストを提出したと考えられる〝文士〟として三人の名があがっているといっているが、明確な証拠がないために、名前をふせている（巌谷大四「動員された文化人たち」）。しかし、蓑田はその三人のうちで最も有力なリストの提出者であったとおもわれる。が、別な方面から、ある容疑者があぶり出されたのである。

情報局の机の引きだしに入れてあった、ブラック・リストを写し取った、という話は、多少まゆつば物（つくり話）めいている。が、それを盗み写した雑誌記者はだれであったのかはわかっていない。他人の机の引き出しをわざわざあけて、そこに入っていた氏名リストをこっそり写し取る行為は、大胆すぎて信じがたい。じっさいは情報局の幹部の机のうえに無造作に置かれていた書類が、たまたまその記者の眼にとまり、急いで写し取ったのかも知れぬ。

ブラック・リストは、謄写版刷りであったらしく、昭和十六年（一九四一）二月から同十八年（一九四三）六月まで、情報局で嘱託（非正規職員）として働いていた新進の評論家・平野　謙（一九〇七～七八）は、そのリストを見たことがあるという（平野　謙「日本文学報国会の成立」）。当時、かれは「文学報国会」を所管していた第五部第三課のアルバイタアであった。

情報局（内閣情報局の略称。昭和15年［一九四〇］に設けられた機関。昭和20年［一九四五］に廃止）は、一部から五部までわかれ、その下の各課がそれぞれ所管の事項を分担していた。第三課のしごとは、文芸銃後運動という全国的な講演会を企画し、その講師の顔ぶれをきめたり、太平洋戦争がはじまる直前、文学者を徴用し、外地に派遣する人選などをおこなった。どちらかというと、文化面の仕事がおもなもので、他の部課とはウェートがちがっていた（平野　謙「情報局について」昭和28・11）。

情報局は、政府の情報活動や宣伝などを行なうとともに、新聞雑誌、書籍にたいする統制をおこなった機関でもある。問題のブラック・リスト

があったという情報局第五部第三課は、文化一般（文学、音楽、美術、児童文化、言語）を担当し、その構成はつぎのようなものであった。

部長　川面隆三――課長・上田俊次（海軍機関中佐、のちガダルカナルに転出）。井上司朗［逗子八郎のペンネームをもつ歌人］が、情報官から昇格し、課長となる）――情報官二名（うち一人は、のちに課長となる井上司朗。もう一人は、相沢［？］という人）――属官二名（斎藤、山泉といった文部省から来た事務官）――嘱託（秦　一郎――児童文化、美術関係担当。宮沢縦一――音楽関係担当。平野　謙――文学関係担当）

平野がたまたま机上にあったブラック・リストをみた当時の課長は、上田俊次中佐であった。ところで中島健蔵が『昭和の時代』のなかでいっている、情報局へ提出した「ある文学者」とはだれのことをいったものか。

その提出者は、文学界のうわさでは、『天の夕顔』の作者として知られていた中河与一（一八九七～一九九九、昭和期の小説家。早大英文科中退）とみられていた。ブラック・リストの提出者と目された中河は、当然そのうわさを否定した。が、当人はもともとが左翼が大きらいであり、戦争中は超国家主義にすがたを変えた。

もしそのリストなるものが、じっさいに存在したとすれば、それは中河らが計画した雑誌の執筆者名簿と混同したものでないかという（中河与一『天の夕顔前後』古川書房）。

ワセダの学生のころの中河与一（25歳）

天の夕顔

つれづれと空を見らるる思よ人天くだり來ひものならなくに

和泉式部

中河與一

信じがたいと思はれるでせう。信じるといふ事が現代人にとつて如何に困難な事かといふ事は、わたくしもよく知つてゐます。それでひるで最も信じがたいやうな事を、最も熱烈に信じてゐるといふ、この狂熱に近い話を、どうぞ判斷していたゞきたいのです。

私は一つの夢に生涯を賭けました。私の生れて來た事の意味は、だから云つてみれば、その夢なげな、然し切なる願ひを、どこまで持ちつづけて、その中で生き得たかといふ事になるのです。馬鹿々々しいと云つて、恐らく人は、身體を

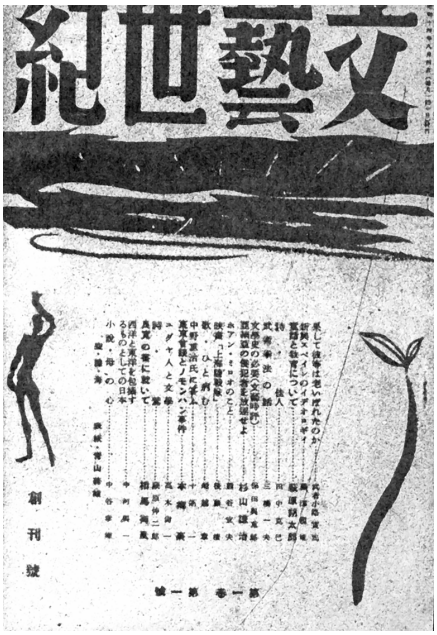
中河の代表作のひとつ「天の夕顔」（昭和13［1938］）『日本評論』新年特輯号にのったもの

昭和十年代の前半ごろ――新官僚（内務省の警保局保安課の事務官――猪俣敬次郎、加藤祐三郎、原　文兵衛）や平凡社の下中弥三郎（一八七八～一九六一、明治から昭和期の教育運動家、出版事業家）らは、総合雑誌（国家的スケールの新雑誌）をつくる計画をたてた。

このとき中河は、三、四人の者とともに相談をうけた。各界（法律、政治、経済、自然科学、哲学、文学など）から、執筆者として百数十名えらび、その名を印刷（プリント）した。つまり執筆予定者の名簿をつくったという（中河与一「自由のための公開状――縄張りの暴力について」）。

この総合雑誌は、中河与一編輯『文芸世紀』（昭和14・8～昭和21・1）として結実したが、のちに軍の情報部から文学界にも協力をもとめて来たので、「とにかく軍の要請によって僕（中河）は、そのプリントを貸与した」という。当時、そのことを『都新聞』の学芸欄に誤りもらした者がいたらしく、誤伝（うわさ）の源泉はこれであったようだ。中河はプリントは、役人がつくったものという。

中河にとって、このブラック・リスト事件は、奇怪な捏造、曲解、悪らつな陰謀にほかならず、じぶんの思想や態度のなかに、多くの誤びゅうがあったことを認めるとしても、文士仲間を売るような卑しいことだけはしなかったつもりである、と述懐している（中河与一「自由のための公開状――縄張りの暴力について」）。



『文藝世紀』の創刊号（昭和14・8）の表紙。

さいごに余談になるが、この中河という著名な作家は、たいへん変った人であった。

かれは四国の坂出町において、一開業医の子として生まれた。その父は医は仁術を地でいくような人物であった。貧しい者につねに寄りそい、施療し、深夜起されても往診に出かけた。六十九歳で脳いっ血で斃れた。葬列は数百メートルにもおよび、物乞いや不具者までその列に加わった。この一事から、この医者が万人から親われ、その徳が高かったことが知られるのである。

中河は丸亀中学から、ワセダに進学し、大正十年（一九二一、二十四歳）同校の予科を卒業後、文学部英文科に入学した。が、翌年の秋――潔癖症（微菌恐怖症）により、中途退学した。いまのワセダは高級ホテル、高級マンションなみの立派な建物が林立しているが、当時の校舎は木造のうすぎたない建物であったらしく、学校を消毒することができぬから、妻・幹子（津田塾卒）に、「もう学校をやめることにした」といって、納める予定の月謝をそっくり持っ

て帰ってきた（中河幹子「彼との生活（二）」）。

その潔癖症は、病的なほどであった。左手はいつも何にもふれず、汚さないようにしていた。銅貨や紙幣は消毒し、かわかしていた。戸をあけるとき、なるべく人の手のふれていない、上の方を右手で開けた。ときに足であけることがあった。

ワセダの学生は、いったいにきたないかっこうをしていた、と英文・宮田　斎（ひとし）教授から、授業中、聞いたことがある。中河は風采はかまわず、うす汚れた着物を着ていたが、それは消毒したものであったから、平気であった。指のつめは、つねにまっ黒であった。なぜならいつも消毒液の昇汞水（しょうこうすい）（水銀と塩素との化合物から成る劇薬）を用いていたからである。この病はその後、十数年つづいた。……

参考文献

森下　節「中河与一私論――ひとりぼっちの戦い」『自由』所収、昭和55・8。

吉野孝雄著『文学報国会の時代』河出書房新社、平成20・1。

平野　謙「情報局について」『平野　謙全集　第13巻』所収、新潮社、昭和50・12。

〃　「日本文学報国会の成立」『平野　謙全集　第五巻』所収、新潮社、昭和50・8。

保昌（ほしょう）正夫「早稲田文学人物誌　54　中河与一」『早稲田文学人物誌　12　』所収、青育社、昭和56・6。

## 一　三木　清　徴用通知をうけとる

昭和十七年（一九四二）一月十六日――三木は丸の内の日本赤十字社東京支部でくだんの「白紙」（第二徴用）の令書をうけとった。かれはそれを持って翌日（？）の朝九時ごろ、岩波書店を訪れた。小林は「こんなに早く、いったいどうしたのだ」ときくと、三木はいつもとちがった顔つきで〝小さな紙きれ〟を差しだした。それは徴用の命令書であった。三木は前夜、どこかの座談会に出ていて、

――徴用するなら、ぼくのような有能の者をしなくてはだめだ。

などと冗談をいっていた。

かれは小林と会ったとき、

――徴用のちょうの字に『心』がつかなくてよかった。

と冗談をたたいたが、いつもと様子がちがっていた。おそらく精神的な動揺があったのであろう。

徴用というのは、東南アジアの占領地における日本陸軍の宣伝班員として召集になった者の意であり、武器をとって戦ういっぱんの兵ではなかった。身分は奏任官待遇――陸軍少佐か中佐あつかいであった。が、肩章がつかないために、ときに雑役夫や馬丁にまちがえられることもあった（尾崎士郎「小説四十六年」）。非戦闘員であれ、一応将校待遇（佐官、尉官）であるから、その体裁をととのえる必要があり、服装は国民服でよかったが、軍刀（軍人がさげる戦闘用の刀）を用意せねばならなかった。海外にでると、帰国がおそくなる懸念があったので、娘の学校をきめておきたかった。そこで三木は友人の羽仁五郎（一九〇一～八三、旧姓、森。昭和期の歴史家。羽仁説子（せつこ）と結婚し、羽仁姓となる）にたのんで娘・洋子を自由学園に入れてくれるように、小林にことづけた。

それから数日後のある日の早朝――三木と火野葦平（ひのあしへい）（一九〇七～六〇、昭和期の小説家。多くの従軍記をかいた流行作家）は、麹町区飯田町二の十一番地にあった小山書店でおち合った。そこには小林ら見送りの者が二、三人いた。夜が明けたばかりのころであり、一同小山夫人の心づくしで簡単なものをたべ、乾杯した。やがて二人は、見送り人といっしょに寒い中を歩いて飯田町から竹橋の兵舎へとむかった。兵営の門のところに着くと、三木と火野は見送り人とわかれた。三木は心細そうに門を入って行ったが、火野は馴れた態度で堂々としていた（小林　勇「徴用の日」）。

昭和17（1942）1月某日――岩崎邸で撮った記念写真。左から栗田賢三，小林　勇，火野葦平，野田宇太郎，三木　清。

その日の午後、岩波の小林のもとに、三木から電話があった。いま品川の岩崎邸にいる。明日南方へむかうかも知れぬから会いに来てほしい、といった話であった。そこで小林は同僚の栗田賢三といっしょに岩崎邸へかけつけた。岩崎邸というのは、三菱の創立者・岩崎弥太郎の弟・二代目弥之助（一八五一～一九〇八、明治期の実業家）が、港区高輪（たかなわ）――御殿山に約一万九千坪の広大な土地を手にいれ、そこに洋館と日本家屋をかまえた、岩崎家の高輪邸のことである（こんどの戦争で洋館は内部が焼け、日本家屋はすべて焼失した。戦後、洋館を修復し、ゲストハウスとした。いまの「三菱開東閣（かいとうかく）」がそれである）。

小林らが岩崎邸へいってみると、広い邸内は徴用をうけた者とその家族、見送人でごったが

えしていた。ようやく三木をみつけた。糸子夫人（喜美子夫人が、昭和11・8・6急逝したのち、その母堂のすすめによって再婚した相手。この新妻も昭和19・3、肝臓ガンで早死した）や娘・洋子さんらも来ていた。小林は広い庭の片すみで、冷たい風に吹かれながら立ち話をしたあと、茶室に入った。三木はブカブカの外とうを着ていた。その恰好はいかにもおかしかった。

まだ明るいうちに写真をとろう、といったのは、火野の友人・ロシア文学者の中山省三郎であった。そのあとまた茶室に入った。すると見知らぬ者が、硯と色紙をもってきて、何か書いてくれといった。三木は照れくさいような、また迷惑そうな顔をしたが、とうとう押しきられ、二、三枚かいた。一枚残っていたので、小林がおれにも一枚かいてくれ、とたのむと、三木はいかにも情けないような、いやな顔をした。小林はすぐ察して、

――形見に書けというのではない。あの歌を書けよ。

といった。それは三木が所帯をもったころ、酒のみ友だちの一人のために短冊に書いた歌だった。三木はそれをこんど色紙に書いて、小林にあたえた。それは――

しんじつの
　秋の日てれば
　　せんねんに
　心をこめて
　　歩まざらめや
　　清

という歌であった（小林　勇「徴用の日」）。

昭和三十九年（一九六四）――三木の郷里・兵庫県竜野に「三木記念碑」がたったとき、この歌が碑にきざまれた。

すぐにも南方のどこかに出発するらしい、といった話であったが、「宣甲部隊」と称した三木ら六十数名の出発はおくれ、けっきょく三週間ほ

ど、岩崎邸にカンズメになった。外泊は許されず、出発前に一泊だけ許可になった。外地行きがおくれたのは、輸送船の都合があったからであろう。三木らは岩崎邸で待機している間に、じぶんらのゆき先がフィリピンであることを知った。この間に徴用員は、予防注射をうけたり、かの地の話を聞いたり、敬礼の仕方などを習ったものであろう。

三木はフィリピン行を知ると、スペイン語の勉強をはじめ、出発のころになると、このことばの大体がわかるようになった。かれは品川にいる間に、たびたび岩崎邸から〝脱走〟した。そのつどかれは酒のみ友だちと会った。仲間はみな戦争に反対の者たちである。日本が戦争に負けることを信じ、情勢が悪化することがわかっている者たちであった。三木は酒に酔うと十八番の「愛染かつら」を唄った。

また酒に酔って誰からも文句をいわれないために、軍歌「兵隊さんよありがとう」を大声で歌ったが、いつもその軍歌には、奇妙なアクセントがついていた。歌詞にある「兵隊さんのおかげです」の部分に差しかかると、わざと大きな声を張りあげた。三木の歌声の強調には、無謀な戦争をはじめた政府や軍部を暗に批判する意があったようだ。

マニラのジョンス橋周辺。仲原善徳著『比律賓紀行』より。

## 二　輸送船「崑山丸」でフィリピンへ

三木ら徴用班員六十数名は、いつ品川の岩崎邸を出てフィリピンへむかったのか。その日時はあきらかでない。また東京を立った徴用班の一行はどのような道順をとって南下したのかもはっきりしていない。すべては軍の機密であり、かれらは南方攻略軍と行動をともにしていたからである。

第一陣の徴用班員としておなじフィリピンに出むいた今日出海（一九〇三～八四、昭和期の小説家・評論家。実録的な作風で知られた。戦後、初代文化庁長官）によると、突然、三木ら第二陣がフィリピンにやって来たのは、昭和十七年（一九四二）の三月だったという。今は三月のいつこの一行が到着したのか、はっきりといっていない（今　日出海「三木　清における人間の研究」『文藝』創刊号所収、昭和21・10、のち『小説集　人間研究』に収録、新潮社、昭和26・5）。

また「比島進攻時の宣伝班員――編者」「集録『ルソン』第44号――軍報道班員、マニラへ」所収、（比島文庫、平成4・3）によると、第一次の報道班員がフィリピンにやって来たのは昭和

16・11・29、第二次の来比は、昭和17・2・28とある［一〇三頁］。

三木ら第二陣は、フィリピンに上陸するまで、一ヵ月ちかくどこをうろついていたのか。それもはっきりしない。この一行はおそらく品川駅から汽車で広島の宇品（通称広島港、陸軍部隊の基地）にむかったものであろう。乗った船名は判明している。それは「□□□の崑ちゃん全速六ノット」と渾名された、大連汽船の輸送船「崑山丸」であった（佐藤勝造「三木さんの放送原稿」）。かれらはフィリピンにむかう船団とともに台湾の高雄、馬公、基隆のいずれかで道草をくったのち、この船は二月末にフィリピンのリンガエン湾（フィリピン北部――ルソン島中西部の投錨地）のダモルチフに上陸した。その後一行は、トラックに分乗し、マニラにむかい、三月一日の夕方首都についた。

三木がのったトラックを運転していたのは、自動車をあやつることがへたな徴用の台湾人であった。そのトラックはマニラの目抜き通りをぬけ、ある四っ辻に達したとき、横あいから走ってきたどこかの部隊のトラックの一台と衝突し、エンジン部分を破壊された。このとき三木は、運わるく大けがをした。からだを車の外に投げだされ、頭を舗道（アスファルトで固めた道）に打ちつけ、裂傷をおった。負傷者は直ちに旧城内（スペイン人がマニラを占有していたころ築いた城塞。こんどの戦争で日本軍がたてこもり廃墟となった。）にあるカトリック病院に運ばれ、入院した。

注・三木が入院したところは、San Juan de Dios Hospital か。

本稿は、フィリピンにおける陸軍の報道班員・三木　清の行動を検証したものである。約十ヵ月マニラに滞在したかれは、軍からどんな任務をあたえられ、それをどのようにこなしたのか。かれはマニラでやっていた仕事については、みずからほとんど語らず、断片的にしかわかっていない。それが軍の機密に属するものであったかどうかもはっきりしない。が、帰国後、三木は諸雑誌や新聞にフィリピンについて九篇論文を発表した。

三木の広義のフィリピン研究は、政治・経済・民族性・教育・言語など多岐にわたるもので、諸書を参考にし、またみずからの実地見分にもとづいてまとめたもので、どれも実証的色彩のこいものである。

## 三　報道班員　三木　清

フィリピンに派遣された報道班員は、昭和十六年（一九四一）十一月――国家総動員法による徴用令第十条により召集された者であり、報道部

長・勝屋福茂中佐の指揮下におかれた。フィリピン派遣の報道部が台湾で編成されたとき、今　日出海ら第一次の班員ははじめて部長の演説をきいた。そのとき勝屋は、「おまえたちの生命はもらったぞ」といい、みなを威圧し、どぎまぎさせた。が、のちに尾崎士郎や石坂洋次郎の収入を知って、「文士ッて偉いもんやなァ。ヘェおれは一生はたらいても叶はんわ」と、あっさり冑をぬいだ。どうもこの人物は、憎めぬ人間であったらしい。今によると、この部長は報道部において数百名の部下をたばねる長であったが、文化行政や文化工作がどのようなものか何もわかってはおらず、運営能力に欠いていたという（「三木　清における人間の研究」）。

報道班員の構成は、大きくわけて、作家（評論家をふくむ）・画家・新聞や雑誌社の従軍記者・映画および写真、放送関係者などから成っていた。文筆を業とするいわゆる〝文士〟としてフィリピンに派遣されたのは、つぎの人びとであった。

第一陣

尾崎士郎（一八九八～一九六四、昭和期の小説家。早大中退。「人生劇場」で知られた流行作家）
石坂洋次郎（一九〇〇～八六、昭和期の小説家。慶大卒。庶民派の流行作家）
今　日出海（一九〇三～八四、昭和期の小説家・評論家。東大卒）
寺下辰夫（一九〇四～八六、昭和期の小説家・詩人）

注・第一陣のうちのこれら四名は、昭和16・11・29フィリピンに到着した。

第二陣

三木　清（一八九七～一九四五、大正・昭和期の哲学者・評論家。京大卒）
火野葦平（一九〇七～六〇、昭和期の小説家。早大中退。従軍記で知られた流行作家）
上田　広（一九〇五～六六、本名・浜田　昇。昭和期の小説家。鉄道省教習所機械科卒。火野とならぶ陣中作家として知られた）
柴田賢次郎（一九〇二～八四、昭和期の小説家。慶大卒。戦記物もかいた）
安田貞雄（一九〇八～九一、昭和・平成期の小説家。）

注・第二陣のうちのこれら五名は、昭和17・2・28フィリピンに到着した。

第二陣の中に軍記物の有名作家――火野や上田がいることを知った今ら第一陣の者は、心づよい気がした。第二陣がマニラに到着した夕刻、一

陣中作家・上田　広

宣伝班本部まえで撮ったもの。
右から今，佐藤，勝屋報道部長，尾崎，向井，田中。尾崎士郎著『戦影日記』より。

行が宣伝部本部の玄関前に整列すると、隊長（報道部長？）に何やら申告した。そのようすを見ていた今らが、そろそろホテルに引きあげようとしたとき、整列している徴用員の中に三木清という長身の哲学者の姿がないことを知った。三木は哲学や評論の筆をとっては当代一流の名をうたわれ、フィリピンの戦地にくるような人間ではなかった。

今のみるところ、三木の頭脳を必要とする用務もなければ、それを利用することができる者もいなかった。三木の姿がなかったのは、すでに述べたように、トラックがマニラ市内に入ったとき、交通事故にあったためである。報道部で三木の顔を知る者は今をおいて他にいなかったから、今は部長に三木の見舞いに行かせてくれとたのみ、その許可をえた。

三木の病院があるところは、歩いてゆくのをためらうような薄気味の悪い所にあった。だから軍の車を必要とした。病院は修道院付属の石造りの建物であり、マニラ湾をのぞむ海岸のそばの古色蒼然とした旧城のなかにあった。旧城は十六世紀にスペイン人によって造られ、その壁は周囲四キロ。そこに狭少なる市街を形成し、役所・寺院・学校・兵営などがあった。今は三木とはそれほど親しい間柄ではなく、顔みしりにすぎなかった。

三木は建物の二階で寝ていた。顔や足に包帯をし、みた目には重症患者のようであった。今が、

――やァ、よく来たね。傷はどうですか。

というと、三木はとげとげしい眼つきをし、

――どうもこうもないよ。こんなひどい目に遭わせておいて、報道部長は君をみまいによこして、知らん顔をしているのかね。

と、いった。

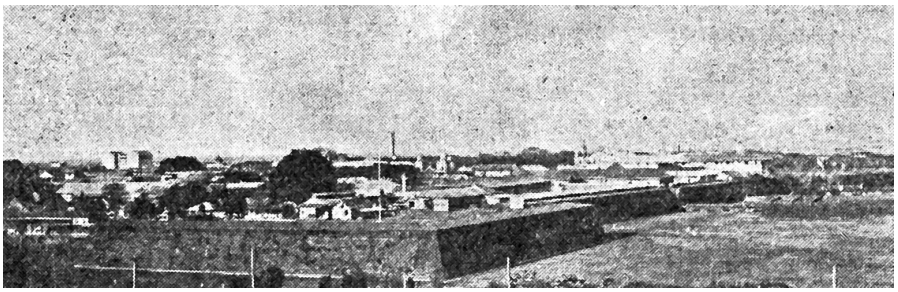
その後、三木の声はだんだん甲高くなり、軍の無道ぶり（道にそむいていること）をさんざ

ん罵倒しはじめた。サンフェルナンドに着いたとき、迎えの自動車（トラック）が来ていなかった。連絡がついていなかったのである。東京から付いてきたヘッポコ少尉はただまごまごするだけであった。四時間も待たされたあげく、トラックにのったのはよいが、大けがをした、とぐちった。それだけではない。奏任官待遇と聞いていたが、輸送船ではふつうの兵や軍馬なみの扱いをうけたとも語った。

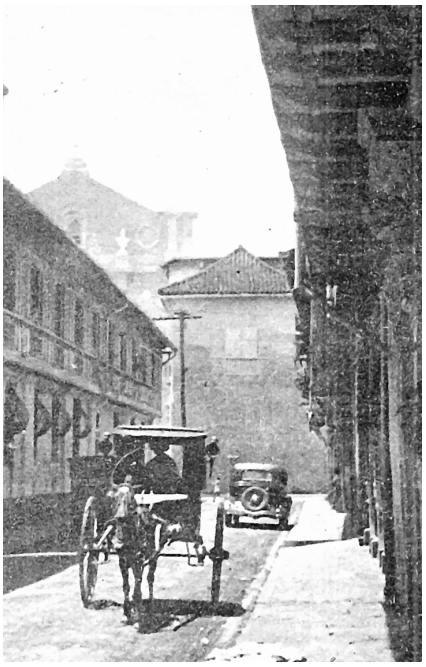
軍人にとっての好況時代、軍人の矛盾や厚顔をまのあたりに見た三木は、こんな軍隊は戦争する資格がない。

こんどの戦争は……だ、と悪態をついた。三木は軍部の悪口をさんざんいったけど、今が着ている報道班員の服をみて、「君はいい服を着ているね」、とその生地をほめた。東京では、物不足がはじまっており、注文服を着ることはむずかしくなっていたからである。

第二陣がマニラに着いたとき、宿がまだきまっていなかった。部長はウィスキーをのみながら、若い将校らと井戸ばた会議を開いていた。この種の会議はしょっちゅう開かれたが、いつもきまりのつかぬものであった。部長は酔いがまわり、うつらうつらしていた。夜の八時、九時になっても徴用員は待ちぼうけを喰っ



旧城内（イントラムロス）
Alip 著　Philippine History より。



旧城（イントラムロス）の内部
中尾建弌著『フィリピン』より。

たま、であった。十時ごろになってようやく宿舎がきまった。

そこは華僑が経営する遊女屋であり、六十余名の徴用員が三軒の店に分散して泊まることになった。第一陣が泊っている「ベイ・ビュー・ホテル」（Bay View Hotel）の筋むかい（斜めにむかい合ったところ）にある連れ込みホテルである。そのせまく、うす汚い宿は、ふだんせいぜい、三、四組の客しか取れぬところであるから、一同部屋ばかりか廊下で雑魚寝せねばならなかった。

宿の問題は、のちに第一陣のホテルに合流することによって解決したが、宿舎問題は、第一陣とあとから来た第二陣との間にふかい感情的な溝をつくり、第一陣は怨まれた。

## 四　部屋にこもった三木　清と同輩との確執

三木が退院したのは、不穏な空気のさなかであり、かれは年輩のうえ、半病人であったから、第二陣の代表よりホテルに入れてやってほしいとの要望が出され、「ベイ・ビュー・ホテル」の北側の一室をあけて、そこに入れられた。第二陣には、宿舎以外に金銭問題があった。一行は東京を出てから経理から給金がわたらぬため、夜になっても酒をのむことも、遊びにも出られなかった。ちなみに、第一次徴用員の尾崎士郎は、フィリピン上陸後、月給475ペソもらった（「集録『ルソン』」第44号）。

三木ら「宣甲部隊」の宿舎となった「ベイ・ビュー・ホテル」は、エルミタ地区の「マニラ・ホテル」につぐ大きなホテルという。九階建ての近代的なホテルであり、各部屋にバスもついていた。第二陣は五階のフロアに滞在したようだ。

三木は退院すると、まっさきに今を訪ね、金を貸してくれといった。今にしてもそれほど余裕はなかったが、断われず残っている金の半分を貸しあたえた。三木は人から金を借りることが平気な人間であった。

このとき今は、はじめて三木を見舞いに訪れたとき、おもわず耳にしたかれが大声で口走った軍の不手際にたいする悪口を話題にした。「戦争はこんなことじゃ負けだ」といった言葉は、「本職の軍人に聞かれなくてよかった」と、今がいうと、三木は舗道に頭を打ちつけたせいで、変なことをいってしまったが、忘れてくれと頼んだ。今は心配しなくてよい、というと安心したのか、三木は紙幣を受けとって出ていった。

その後、第一陣と第二陣とのあいだで、宿舎や手当（俸給）の問題から、ぎくしゃくした感情が芽ばえ、口論や暴力事件まがいのものが発生し

た。今はうかつにも、三木がむかし少し左傾がかったことや反軍的な人間だと、仲間にちょっともらしたものか、そのことを敵対する者から指摘された。

今のみるところ、三木は経歴や学識において比軍ちゅう随一であった。第一陣や第二陣の無学者からすれば、三木はじぶんらとは比べものにならぬえらい人であった。しかし、かれはだれとでも要領よくつき合い、どこからみても難（欠点）のない人間ではなかった。人みしりした。

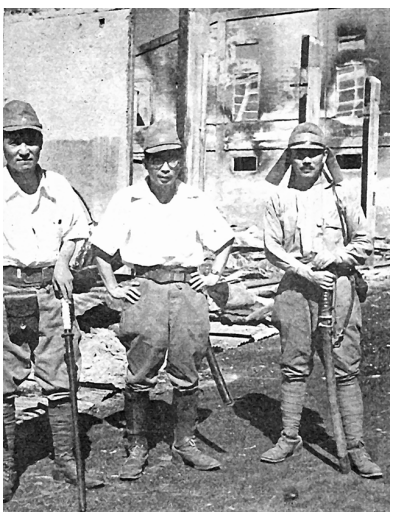
ここで作家などの報道班員は、マニラ入りをしたのちどのような仕事に従事したかについて述べてみたい。

尾崎士郎……第一陣数十名は、昭和十六年（一九四一）十一月すえ、リンガエン湾のサンチアゴに上陸した。その後、日本軍とともにマニラにむかい、翌十七年（一九四二）一月四日マニラに入った。宣伝部の宏壮な建物の二階で、N参謀から指示をうけた。当面のしごとは、軍政に関する最高司令官の「布告」を市内の各所に貼ることであった。

その後、「弔詞」をかいたり、タガログ語の地区を視察したりした。のちバターン総攻撃に参加する宣伝部隊の要員となり、「伝単」（宣伝びら）づくりなどに従事した（尾崎士郎『戦影日記』小学館、昭和18・5）。

注・「伝単」の文章を日本語でつくると、それを外国語班の者が、英語やスペイン語に訳した。

マリラ市街『南洋地理体系　第１巻』より。



左から尾崎，今，田中。バタンガスで撮ったもの（昭和16・２・８）。尾崎士郎著『戦影日記』より。

なお、尾崎は報道部長の勝屋中佐とは知り合いであり、東京で何度か会ったことがあった。それが期せずして、今回勝屋の部下になったのである。あるときは、悪性の扁とう腺炎をわずらっていたが、バターンやコレヒドールの最前線に出て、対敵宣伝のために、伝単や投降票づくりをやった。尾崎は方向おんちであったらしく、マニラ市内をひとりで歩けなかった。酒によると、土俵入りをやってみせたり、浪曲をうなった（尾崎士郎著『煙煙』生活記、昭和18・7によせた、勝屋中佐の「序文」を参照）。

石坂洋次郎……ときどき本部に出勤したようだが、午後になると、うさばらしに市街をぶらつき買物をした。今によると、石坂は買物狂（マニア）であり、五〇円もの大金をだして求めたフランス人形を枕もとに飾っていたという。おもに宣撫用の「伝単」づくりの仕事をやったようだ。暑さに閉口し、生きるためのエネルギーを保つのが精一杯だとなげいた（今『青春日々』）。

今　日出海……まいにち本部へ顔をだしたが、仕事らしい仕事はなかった。ときに前線へでむき、後方にあって文化工作に参画した（『青春日々』）。「伝単」、映画や芝居や音楽などを統轄する（まとめる）しごとをやった。

寺下辰夫……「伝単」づくりの仕事に従事した（「集録『ルソン』第44号」。

## 第二陣

あたえられた本務については明らかでない。が、石坂洋次郎によると、軍司令官が出す「布告」（国民に告（つ）げ知らせる文章）の代筆をやっていたという（『昭和史の天皇』読売新聞社、昭和40・7）。

またマニラ市内の図書館にかよい、フィリピンに関する書をあさったようである。さらに今によると、三木はうすぐらいホテルの部屋で、机のうえに洋書を積みあげると、ノートに抜き書きのようなものを作っていたと語っている（「三木清における人間の研究」）。今はかれの勉強ぶりをみて感心したという。

三木　清……

ほかに文化工作のしごととして、官吏養成所や捕虜収容所で、通訳を介して、東亜共栄圏の思想について講話したり、原住民をまえにして、日本政府の方針など、宣撫的な話をした。また東亜共栄圏の共通語とする日本語の普及に関係したというから、教材づくりに従ったということか（「比島人の東洋的性格」「新しい環境に処して」「比島人の政治的性格」などを参照）。

注・今によると、尾崎・石坂・三木ら三人は、「出勤免除組」であったという。

火野葦平
上田　広　……この二人は、今によると、前線に出たという。したがって両人はバターン半島攻略戦に参加し、その軍記をかく仕事に従ったものであろう。

柴田賢次郎
安田定雄　……この二人の任務は定かでない。

初代のフィリピン派遣軍の報道部長・勝屋福茂中佐は、宣撫や宣伝工作については経験がとぼしく半素人（しろうと）であったらしいが、前歴は、上海派遣軍の報道部長であった。だから「おれは何も知らん。ひとつみんなで考えてやってくれといって」、よけいな口出しをせず、報道部の自主的な活動にまかせた。

報道部付の将校に、

人見潤介中尉（のち、大尉。満州独立守備隊からの転任者）
横井健男中尉（のち大尉）
望月重信少尉（東京帝大卒。のちゲリラの襲撃をうけ戦死）

報道班員・柴田賢次郎の小説『マニラの烽火』日本文林社，昭和18・12。

などがいて、勝屋を補佐していた。が、望月少尉がかけ回って、尾崎士郎を中心に企画班を編成すると、大綱（おおもと）をきめ、逐次じっしに移していった（『インタビュー記録　日本のフィリピン占領』、四九〇頁）。

出勤免除組のひとり、三木はいつも部屋にカギをかけると、どこへ出かけるのか、留守にすることが多かった。今らはいつも昼食を宣伝部本部（「ベイ・ビュー・ホテル」から七、八分のところ、元「マニラ・クラブ」と称したイギリス人のクラ

注・『集録『ルソン』第44』を参照。

三木清における人間の研究

今　日出海

一

前記を先にいふならば昭和十六年十一月頃家族動員法による徴用令第十條により私は徴用されたのである。後から判つたことだが軍部は比島方面、それからジャワ方面、印刷、出版といつた風に関係部門に南方作戦の視察班員をぞろぞろ編成し、文士、畫家、教師、寫眞屋と一種雑多作戦に必要な人員を徴用した。

今　日出海の小説「三木　清における人間の研究」『文藝　増刊号』所収。昭和21・10。

ブ）の食堂でとっていたが、やがてハイアライ地区の白亜の冷房がきいた食堂（レストラン）で食べるようになった。三木もそこに出入りしていた。バタン半島――コレヒドールの戦火がおさまり、マニラ港に商船が入るころになり、港口に日本船の影をみとめると、三木の心は落着かなかった。

故国からくる女房の手紙が待ち遠しく、外聞をはばからず、手紙をうけとるために、毎日本部がよいをやるのだといった。ハイアライの食堂でも、会食のとき、手紙やヘソクリ、印税のことなどが話題になった。三木は「哲学案内」（入門）がよく売れたので、印税を郵便貯金にしてもって来た、いまに野戦郵便局が開設されると引き出せるかも知れぬといった。

健康体の者が、長いあいだ外地で禁欲生活をしていると、いろいろストレスがたまり、神経がやられるらしい。今は徴用になる一、二年まえのフランス滞在から、そのことがよくわかっていた。だからかれはたびたび柴田その他の悪友と妓楼にあがった。

ストレスの発散のしかたは、人によってちがっていた。懐郷病（ホームシック）にかかっていた石坂は、毎日午後に買物に出かけ、街中をうろついた。かれは東京にいたら見むきもしないような品物を買うために、出歩いた。そのことを知る三木は、ガダルカナル島（南西太平洋、ソロモン諸島南部に位置。太平洋戦争の激戦地）の戦局が不利の折、こんなだらけたことでよいのかと、部長や班長があつまった会議のとき、手ひどくかれをののしった。

三木がいいたかったのは、戦地に買物に来ている者がいることだった。また士気がおとろえ、ふぬけになり、酒色におぼれ、青楼へ登る兵があとをたたぬことであった。が、当の三木はどのようにストレスを発散していたのか。かれの部屋は、「ベイ・ビュー・ホテル」の北側の――うす

ぐらい所にあった。かれは灼熱にうだったり、退屈すると、ホテルの調理場の屋根にある物干し台に登った。そこは、つれ込み宿の部屋の中がまるみえの穴場だった。かれは西洋でいう――

Peeping Tom（のぞき屋）

注・わが国には〝出歯亀〟（のぞき見する助平男の意）という語がある。

をやっていた。のぞき見にあきたら勉強し、昂奮したときは……をするんだ、といっていた。

今は三木がひたすら孤高を持して、まじめに暮らしていることを心配し、すこしは女とあそばないと神経衰弱になる、といった。かれはそんなことをすると、いまにV・D（性病）にかかるといった。三木がいう……は、金がかゝらぬ、じつに合理的な処理法であった。

やがて徴用員のあいだで、三木は腹ぐろい、といった風評が立つようになり、その評判は悪化した。

かれは気にくわぬ人間を人前で平気でののしった。かれは報道部長の信頼があつく、人気者の尾崎士郎が大きらいであった。ほかに石坂洋次郎や部長のたいこもちの絵描き連中のことをよく思っていなかった。三木は部長がいない場で、かれの悪口をいった。あんなくさった軍人はいない。機密費十四万円をみんな酒色に使っている、といった。部長は会議のとき、三木が石坂の買物狂のこと、時局を認識せず、酒や女におぼれている兵士が多いというのを聞き、耳がいたかった。部長は目のまえの机の上に、繁華街のエスコルタでもとめたライター、タバコ入れ、パイプなどの小道具を並べていたからである。三木は後日、あのときは、部長に当てつけていったのだと語った。

三木は石坂の買物癖のことを非難したが、じぶんもそ知らぬ顔をして秘かに買物をしていた。かれが求めたものは、綿布（テーブルかけ、シーツ）や毛糸であった。内地では衣料（着るものと、その材料の布地）が不足しだしていた。それらがいずれ底をつくと思い、はやばやと手に入れようとした。かれの部屋のすみに、古いトランクが二つ積み重ねてあったが、そこからこういった品々が顔をだしていた。

日が傾くと、三木はよく一種の社交室のようになっている石坂の部屋を訪れた。そこにはいつもおとなしい連中があつまっていた。とくに変っ

た話題はなく、買物の話や内地からくる郵便のことをくり返していた。が、三木がやってくると、話題が一変した。かれは、部長の悪口や尾崎の生活ぶりなどを皮肉たっぷりにいった。みなかれの底意地のわるい話を聞きあきており、気の弱い者の中には、窓からみえるマニラ湾の船の青い灯をつまらなそうに見ている者もいた。

「白紙」一枚によって外地に遣られた報道班員は、暑熱の国で一年ちかく暮らすと、だれもが性格に異常をきたし、怒りっぽくなったり、悪賢こくなったり、ふぬけになったりした。中にはうつっぽくなる者もいた。

しかし、共通した病は、早く日本へ帰りたいといった〝郷愁〟であった。三木はだれもじぶんの話を聞いていないと思うと、いら立ち、ぷーッと部屋から出てゆくのが常であった。かれは人気者の尾崎にしっとし、かれを凡ような愚物ときめつけた。新聞記者らは、いままで世間に知られていなかった三木のみにくい、人間的一面を興味をもって見ているようであった。

今がマニラで目にした、三木とはどのような人間であったのか。その人間性を分析すると、つぎのように要約できそうである。

一　自己顕示欲やうぬぼれがつよく、みずから宣伝部ちゅう随一の知識人とおもっていた。
一　人の目をごまかし、自分を大きくみせようとする傾向があった。
一　気分にむらがあり、前後矛盾したことをいった。
一　よくたしかめもせず、密告を平気でやった。

注・部長は、暗に三木のことを「学問もあり、頭があっても、人間は信用できんものやなァ」といった（「三木　清における人間の研究」）。

一　俗気のある人間とおもわれた。
一　人前で、だれかれかまわず、悪口を平気でいった。
一　反軍的なことを口にした。
一　臨機応変な人間であった。

要するに三木は円満な人格者ではなかった。その学を別にすれば、長所や短所をあわせもつふつうの人間であったろう。部長の陰口をさんざん

たたいた三木は、部長が昭和十七年（一九四二）十月二日――関東軍へ転出する際に送別会が開かれたとき、突然ひとことしゃべらしてくれといって立ち上がると、かれを大いに持ちあげた（世辞をいってほめた意）。

――部長は生まれて始めて、種々雑多な人間からなる報道班員と会い、勉強になったと言はれましたが、その中でも哲学者という奇妙な存在（人間）と出会ったことは珍しい出来事だったと思われます。わたしのような変てこな人間を、部長は等しく部下として慈しみ下さいましたことに感謝いたします。部長は毛色の変った雑多な人のあつまりである報道部を一糸乱れず統率し、その任務を遂行し、測り知れぬ業績をのこされましたが、それは部長の円満にして高徳なご人格のなせる業とおもわれます、と三木は歯が浮くような世辞をいった。

それを聞いた部長は感激し、涙を流していた（「三木　清における人間の研究」）。このように三木は機に乗じ、平気でおべっかいをいう人間であったようだ。ひとはお世辞をいわれ悪い気持をしないのがふつうなら、三木は人情の機微によく通じていたといえる。

## 五　三木　清のフィリピン研究

三木がフィリピンから帰国したのはいつのことか。それは昭和十七年の十二月末あたりだったと思われる。マニラを発つ十二月中旬――三木ら数名の宣伝班員（尾崎士郎、石坂洋次郎？）は、某将軍（おそらく第十四軍の第二代司令官・田中静壱中将（一八八七～一九四五、――一九四二・8・1～一九四三・5・19在任、戦後、自決）から送別のいみで招待された。そのときフィリピン人のことが話題になった。将軍はフィリピンに来るまえ、中国にながくいたが、当地に赴任したとき、フィリピン人がきらいであった、と語った。

しかし、いまではかれらが可愛くなり、かれらのために尽力したい気持があると述懐した。その将官がはじめフィリピン人が嫌いであったのは、かれらの〝アメリカかぶれ〟が目についたからであり、かれらに対する見方がかわったのは、〝東洋的性格〟をもっていることを知ったからであろうと、三木はいう。

三木の**「南方から帰って」（『一橋新聞』昭和18・2・25付）**は、帰国後はじめて発表したフィリピン報告である。それは学問に関係ある感想をのべた小記事という。三木はフィリピン体験から、しみじみ語学の必要性を痛感したようだ。フィリピンでは英語だけでじゅうぶんといえないが、少なくとも英語ができないと、第一線のしごと（大事なしごと）はできないという。当地において最もめざましく活躍している人間（フィリピン

人のことか）は、アメリカで幼稚園から大学まで教育をうけたひとという。戦時中、英語は敵性語ということで内地（日本）で教えることをやめたが、三木によると、だからといって排斥すべきではなく、その知識は武器のひとつになるという。戦いはつねに相手があることだが、相手（敵）を撃破したり、原住民を説得するには、どうしても通じることばや論理が必要になる。感情だけでは意思の疎通をはかることはできない。日本精神とか日本的世界観（東亜共栄圏のことか）は、日本人同志のあいだなら、以心伝心に感情（きもち）だけでわかるかも知れぬという。

第２代　第14軍司令官・田中静壱中将

こんど南方で宣伝戦や思想戦に従事した者が痛感したのは、どうしたら日本の思想――日本的な精神主義を敵もしくは現地人にわからせることができるかということであった。また外国人の調査や研究成果とは異なる、じっさいに即してえた知識が必要だということであった。

三木がこのエッセイにつづいて帰国後に発表した長編論文は**「比島人の東洋的性格」（『改造』昭和18・2）**であった。かれはこの論文の冒頭において、将軍の述懐に感銘をうけたと世辞をいっている。三木はフィリピン人の性格のうちに〝東洋的なもの〟を見いだしたことがこの論文を書いた動機のようにいっている（ただし本心から出たことばかどうかは定かでない）。やがてかれは諸書を調べ、じぶんの見聞をくわえ、まとめたのがこの論文であったようだ。

三木はフィリピンに行くまえ、フィリピン人はアメリカ化されていると聞いていた。が、じっさい現地に行ってみて、ちがった印象をもったという。アメリカ化をもって、フィリピン人の実体（不変の本質）を現すものと考えてはならぬという。三木のみるところ、フィリピン人は東洋人なのである。かれらは他の東洋の諸国民とおなじように、共通した性格をもっているという。

三木はいっている。

南方地域において、もっとも多くの西洋文化の影響をうけたといわれるフィリピン人の性行（性質とおこない）のうちに、東洋的性格をみいだしたという。そこから導びかれたかれの考えは、

アジアは一つであるということ。

フィリピン人を指導する資格があり、指導せねばならぬ責がある者は、日本人であること。

こんどの戦争の目的は、アジアの民族を英米の帝国主義の重圧から解放することであり、それは同時に歴史的な必然であるということ。

こういった考え方は、思いあがった日本の軍国主義的構想――大東亜共栄圏（日本が欧米諸国にかわってアジアを支配することを唱えたスローガン）や八紘一宇（一つの家のように統一して支配しようとするスローガン）を具現化しようとしたものに他ならず、三木はまるでその宣伝者（プロパガンディスト）のようでもある。ここまでが、いわばこの論文の「序」にあたるところである。

ついでかれの筆は、その客観的な視点から、フィリピン人の各特徴をひろい、それらについてふれている。

**フィリピン人のニヒリズム**

街中の家の窓から、じっとすわって虚空（こくう）（何もない空間）をみつめている人間。音楽や賭ごとが好きなフィリピン人。死にたいしてあきらめがよいのは、キリスト教の影響によるものと思われ、そこに東洋的な宿命観、あきらめの哲学――虚無感が根底にあるように感じられた。街中でときどき、子どもを連れて遊ばせている中国人の女中のすがたをみかけるが、その子らはスペイン人か他の西洋人の子どもであった。じぶんの子どもを人まかせにして育てるのは西洋の風習であり、フィリピン人の間には存在しない。

**子どもに対するフィリピン人のたいど**

フィリピン人は、子どもに対する愛がつよい。教育に熱心であり、じぶんを犠牲にしてまで、教育をうけさせようとする。この点、日本人と似ているという。

**フィリピン社会**

「家族」や親せきを基礎とした家族制度が存在する。首長（集団を統率するかしら）がいて、血縁ある共同生活者に保護や衣食をあたえている。フィリピンに物ごいがひじょうに少なく、また養老院がないのは、この家族制度のおかげとみられている。かれらは通りすがりの旅人すら家に泊め、かつ歓待する。

**女尊男卑の風潮**

アメリカびいき、欧米崇拝の影響をうけ、女性の地位は高い。いわゆる「かかあ天下」の社会である。

**フィリピン人に特有の性**

動作はのろく、不精にみえる。気候・風土のせいと考えられる。顔は無表情。落ちついている。動作が緩慢な理由のひ

質

とつは、偏食（野菜不足）や栄養不足からくる疾病（やまい）――かっけ、腸内の寄生虫、マラリヤ、肺病に一部原因があるようだ。しかし、三木は、かれらが怠惰なのは、たぶんに暑い気候のせいによるものとみている。

フィリピン人の礼儀（敬意）のあらわし方

帽子や頭巾をとっておじぎをする。雇ってくれている主人やえらい人の前では二人称を用いず、三人称を使う（だんなさん、奥さんなど）。歩哨（警戒や監視の任にあたる日本兵）のまえを通るときは、かれらにていねいにおじぎをして行く。なぜか。そうしないと、〝平手打ち〟（ほおを手で打たれること。びんた）されるからである。ほおを打たれることは、かれらにとって最大の侮辱でもあった。

フィリピン人のきれい好き

日本人に似て清潔をこのむ。いつもさっぱりとした身なりをしている。汚れた衣類を溝や川岸へもって行き、洗たくする。洗たくものに石けんをつけ、石のうえで木のヘラで打ったのち、何度も水にひたし、草や砂利のうえに置いてかわかす。

フィリピン人の計画性のない暮らしぶり

明日のためより、きょうのために生きる傾向がある。

農民の生活情況

大地主に依存した小作農が中心。高利貸から金を借り、作づけをする。小作農は負債や貧困から抜け出せない。

フィリピンの商業のは権をにぎっている者

それは天成の商人といわれる華僑である。

要するに、三木がフィリピン人のなかに見いだした東洋的性格とは、およそつぎのようなものであったと思われる。

一　フィリピン人は、東洋的諦念、虚無感をもっている。

一　根本的な性格は、東洋人的である。
一　西洋人のゆたかな表情と比べると、フィリピン人は無表情である。動作はのろいが、落着きがある。落着きは、東洋人に共通の特徴である。
一　フィリピン人は、東洋人としてていねいであり、かつ礼儀をわきまえている。
一　東洋社会の基礎をなすものは、農業や家族主義（個人よりも家族全体をおもくみる考え方）である。
一　フィリピン人は、恩を感じる東洋的道徳をもっている。

三木によると、日本のばあい、国家そのものが一つの家族なのである。軍隊を例にとると、それを内面的に結びつけているものは、家族的な精神である。

東洋的社会の特徴である家族主義を純粋なものにし、発展させたのは日本である。これまでフィリピンの家族制度にみられた、人の世話になって暮らす寄食的な精神――個人主義的な家族主義を脱し、みずから新しい国づくりに尽力せねばならぬという。フィリピンという家族が発達し、家族の平和をうるには、東亜共栄圏の精神を体し、奮起する必要がある。日本人はフィリピン人の父とも兄ともなって、かれらを指導せねばならない。

個人の見解は一面的なものであるから、正こくを失していることも往々にしてあることであろう。が、三木はこの論文を書くさいに外国人の説をひいたり、じぶんの見聞談をそえたりしている。本論に出てくる外国人の人名は、つぎのようなものであるが、それには生没年や参考にした記述の出所――出典をまったく明かにしていない。たいてい著者の名を引くだけでおわっている。

［三木の表記］
「ソーヤーは（10頁）……」「例 ⟶ イギリスの領事代理フレデリック・H・ソーヤ（生没年不詳）。ルソン島で十四年くらし、この間群島をひろくへばソーヤー（一九〇〇年）は言ってゐる……」　旅行し、『フィリピンの住民』The inhabitants of the Philippines, S. Low, Marston & Co., London 1900 を著わした。
「パルグレイブは（12頁）……」 ⟶ ウィリヤム・ギフォード・パールグレイブ［一八二六～八八］、探検家・イエズス会士・外交官。フィリピンに

関する著述がある。

「クロフォードによると（13頁）……」→アメリカの宣教師タールトン・ヘンリー・クロフォードのことか。生没年不詳。漢名・高弟丕。

「ロムアルデスといふフィリピンの学者は（15頁）……」→ノルベルト・ロムアルデス［一八七五〜一九四一］、フィリピンの作家・政治家・法律家。レイテでココナッツとマニラ麻の農園をもつ裕福な家に生まれた。

「神父フランシスコ・コリンの記録（一六六三年）によると（17頁）……」→スペインのイエズス会士［一五九二〜一六六〇］、元従軍司祭。のち『フィリピン・イエズス会布教史』（一六六三）を編んだ。

「神父チリーノ（一六〇四年）は（20頁）……」→スペインの宣教師［一五五九〜一六三五］、『フィリピン群島布教誌』（一六〇四）を刊行した。

「ウースター（一八九八年）は次のように書いている（25頁）……」→ディーン・コナント・ウスター［一八六六〜一九二四］、アメリカの動物学者、フィリピン植民地政府官吏。『フィリピン諸島とその人々』（一八九八）を著わした。

「カルデロンのいったごとく（28頁）……」→フェリペ・ゴンザレス・カルデロン［一八六八〜一九〇八］、法律家・政治家。

「ロアルカ（一八五二年）による と（35頁）……」→ミグエル・デ・ロアルカ［生没年不詳］、スペイン人。フィリピンにやって来た最も初期の征服者。

「宣教師ローバックは（37頁）……」→フランク・チャールズ・ローバック［一八八四〜一九七〇］、アメリカの会衆派牧師、識字運動家。

「有名な旅行家カーペンターは書いている（41頁）……」→メアリー・ソーン・カーペンター［一八〇七〜七七］、教育・社会改革者。『カイロとイエルサレムにおいて――東方のメモ』（一八九四）を著わした。

「イグナシオ・マンラパスの言葉によると（44頁）……」→不詳。

「またコンラド・ベニテス教授は」→フィリピンの作家、教育者、政治家［一八八九〜一九七一］。フィリピンの師範学校を出たのち、官費留学生と

（48頁）……」

「フィリピンの学者エピファニオ・デ・ロース・サントスは（49頁）……」

→ フィリピンのジャーナリスト、政治家［一八七一～?］。裕福な家庭に生まれ、サント・トマス大学で法律をまなぶ。各紙の記者となって活躍し、のち政治家となる。フィリピンの歴史・文化・文学に関する書を著わした。

「アメリカの学者リイ・ロイのいうごとく（50頁）……」

→ ジェイムズ・A・ルロイ［一八七五～一九〇九］、アメリカの教育者・新聞記者・作家・外交官。フィリピンに関する書物をたくさん著わした。

「フロレンス・ホーンが皮肉にもその書物の題名としたように、『太平洋の孤児たち』であったのである（51頁）……」

→ 不詳。同人が著わした書物とは、Orphans of the Pacific — the Philippines, Reynal & Hitchcock, New York, 19…である。三木がもっている版本は1941年の二版である。

注・（ ）内のページは、『比島風土記』（小山書店、昭和18・12刊）ちゅうのページ数をしめす。引用者が入れたもの。

**「南方の大学――教育機関と基督教」（昭和18・3・2～3、3・3～4『毎日新聞』）**は、フィリピンにおける大学とか専門学校といった高等教育機関についてのべたエッセイである。戦前フィリピンには大学が八校あり、カレッジと呼ばれる専門学校はさらに多くあった。国立大学はフィリピン大学（一九〇八年の創立）だけしかなく、他はすべて私立大学であり、ほとんど文化都市マニラに集中していた。大東亜戦争（太平洋戦争）がはじまると、大学・専門学校は閉鎖されたが、日本の軍政は、学校を再開させ、小学校から大学まで日本語を必修科目とした。

フィリピンで最古の大学は、私立のサント・トマス大学（一六一一年の創立）である。フィリピンで多いのは法科と医科の学生だという。法律

を学ぶ学生は、官吏や弁護士になりたがる。日本の軍政は、高等教育よりも普通教育を優先させた。大学があるところには、本屋もあるのがふつうだが、三木はろくな本屋がないという。

マニラにあった本屋は、一、二軒だけで、その本屋には古典的な本はほとんどなく、並んでいるのはアメリカのベスト・セラーズ（よく売れる本）である。本は学生にとってデパートの流行品とおなじである。大学生は勉強することより、生活をたのしむことに熱心である。日本の軍政は、生産的、経済的な事業を重視するいわゆる実業教育を重視する方針をさだめた。

三木がつぎに発表したものは、**「フィリピン」（昭和18・3『中央公論』）**である。これはフィリピン社会を㈠アメリカ化、㈡人口構成、㈢農業や産業、㈣軍政上の課題などから概観したものである。

三木によると、首都マニラに入って目についたのは、アメリカ製品の広告であり、目抜き通りの商店には、植民地むけの二流品があふれていたという。フィリピンにおいて最もアメリカの影響が顕著なのはマニラである。高等教育をうけた若者は、考え方がアメリカ的であり、得々として英語を話しているが、年輩者になると、三百年にわたるスペイン文化の影響もあって、スペイン語を話すものもすくなくない。

三木は一九三九年（昭和14）の人口調査をひいて、フィリピンの人口は、約一千六〇〇万という。その九〇パーセントがキリスト教徒である。圧倒的にカトリックが多く、人口の七〇パーセントを占め、プロテスタントはわずか三〇パーセントにすぎない。フィリピンの田舎に行ってまず目につくのは、つぎの二つである。

教会……スペイン時代の建物。

学校……アメリカ時代の建物。その数は、八九一二校（一九一二年の統計による）。

学制は七年で、アメリカ式。

フィリピンの人口の大多数を構成しているのは、農夫である。村にいって石造の家をみたら、それは古くからの地主の家である。一方、屋根をニッパ麻の葉でふき、高床式の家がむらがっていたら、それは農民たちの家である。かれらは概して貧しいが、子供らの教育にはひじょうに熱心

である。しかし、貧困から子供を三、四年しか学校にやれないのである。

フィリピンでいちばん重要な産業は、つぎの順序になっているという。

第一位……米作
第二位……玉ネギの耕作
第三位……ヤシの栽培
第四位……砂糖の生産

米はフィリピン人の主食であり、その食物のおよそ75％は、米から成っている。三木によると、フィリピン人は、地理的、人種的に東洋人であるばかりか、その基礎的な産業からいっても、東洋的農業社会に属しているという。

農民は、日本の小作農とおなじように、つねに地主への負債に苦しんでいる。かれらは慢性的に借金地獄から抜けだせないのである。なぜなら、収穫のない間の生活費、種つけ用の米を買うために地主から高利で金をかり、米の収穫後に借金を返すのであるが、そのとき米を安い値で売らねばならない。そのときまた金を借りるからである。金を借りるのは地主や中国人の商人からである。

フィリピンにおいて金持というと、ほとんどが地主である。金鉱、タバコ、ヤシ油等の大産業は、だいたいがアメリカ人かスペイン人によって占められている。

三木がマニラにいたとき、「ある有力な方面」（フィリピン政府すじか）から提出された問題があった。それはフィリピン人がよく口にする問でもあった。

スペインはわれわれに教会を、アメリカは学校をあたえてくれた。日本はわれわれに何をくれるというのか。そのとき、'精神'（日本の精神文化）と答えるのがほとんど一致した答えであった。西洋やアメリカ文化に染っているかれらに、東洋人としての自覚をあたえ、かれらがもつ東洋的性格を強固にする必要がある。フィリピン人の心をとらえるには、人口の大部分をしめる農民の生活を向上させ、かれらに生きる希望をあたえ

ねばならない。

三木によると日本が具体的にフィリピンにあたえることができるものは、そのすぐれた農業技術（輪作――田や畑に、数種の作物を順々に栽培する方法）なのである。フィリピンにおける農業が発達しないのは、土地制度や小作制度が障害になっているからであるが、当然その改善も必要になってくる。フィリピン人は手先が器用であるから、農民のくらしを豊かにするために、家内工業を起す必要もある。

フィリピンの知識階級が直面しているのは、失業問題である。その解決には、日本の軍政との関連で、その力を利用することである。たとえば、かれらを養成して日本語の教師にしたり、日本研究をさせ、日本の思想や文化をフィリピン人に伝える橋わたし（仲立ち）とすることである。

**「比島の言語問題と日本語」（昭和18・5『日本語』）**は、フィリピンがかゝえる言葉の問題と日本語とのかかわりについて述べたものである。大小七〇〇〇余の島から成るこの群島には、八十七もの方言があり、フィリピン人は共通語をもたないという。なぜそんなに方言が多いのか。一つには他国からつぎつぎと移住者がやって来て、多数の島に住みつき、お互いじゅうぶんに交通がなく、孤立したからである。

スペイン人がはじめてフィリピンにやって来たのは、キリスト教の伝道のためであった。が、かれらは言葉の問題に直面した。宣教師はスペイン語によらず、土語（土着の住民が用いることば）をもって布教した。本国政府（メキシコ政庁）は原住民にたいしてスペイン語を教えるよう主張したが、植民地当局は原住民を無学にしておいた方が政治上のめんどうが少いと判断し、愚民政策をとった。少数のフィリピン人だけが、スペイン語を学ぶことができ、かれらは官吏や地主、富裕な商人になった。フィリピンにおけるスペイン語は、大衆のことばとならず、富裕層、上流階級の言語となった。

スペインは一八九八年（明治31）のアメリカとの戦争の結果、キューバとフィリピンをうしなった。フィリピンの支配者となったアメリカは、この国に学校をたくさん作り、英語教育をはじめた。しかし、まだ五〇％の文盲が存在するという。英語は大衆化しているようだが、田舎に行ってみると、さにあらず、コミュニケーションには土語（方言）がまだ必要なのである。タガログ語が公用語とされたが、日本の軍政が布かれてから、

とを公用語にすることが宣言された。三木によると、軍政をフィリピンに行きわたらせるために、また日本文化を浸透させるためには、日本語を早く普及させることが肝要だという。

日本語は、直接教授法によっておしえ、それを学ぶとどんな利益があるかも教える必要がある。日本語の普及には、小学校においてそれを教えることが最も重要だという。ただ日本語を教えるだけに力を尽くのではなく、土語の中へ日本語を入れてゆくことも考えねばならぬという。

外地の観点から日本語をみるとき、とくに重要になるのは、読み書きよりも、〝話すこと〟を教えることである。なぜなら、会話は人がことばを覚える自然的な過程だからである。

**「新しい環境に処して――南方からの感想」（昭和18・5『婦人公論』）**は、南方における見聞や外国書をもとに記した随想（エッセイ）である。工夫や発明というものは、小さな事柄の中にあること。外地においてまず大事なことは環境に順応することである。日本語と現地における邦人の役割、軍政に原住民を協力させる方法、戦局の変化からくる新しい環境における国民的自覚などについてのべている。

兵隊は物がない戦地でも、わずかにある物をたくみに利用し、間にあわせることを知っているという。かれらには創意と工夫の才があるのである。かれらはまたたく間に宿営地をつくると、そこで何とか暮らせるようにする。南方においてまず必要なのは、その暑い気候になれ、原住民の生活のありようを学ぶことである。フィリピン人は毎日〝昼る寝〟をするが、それはきびしいあつさにおいて必要な保健法だという。現地においては、軍人も官吏も会社員も、日本人なら、みな日本語の教師だという。軍政や文化工作の主なる目的は、フィリピン人の心をとらえ、日本の軍隊に協力させることである。そのためには、かれらの風習を知り、信頼と愛情をえ、心服させることである。人の心をつかまえるものは知識ではなく、人間だという。

ではどのような人間がかれらの心を把握できるのか。フィリピン人の心をとらえるのは、リサール（一八六一～九六、民族運動家）やケソン（一八七八～一九四四、フィリピン共和国の初代の大統領。日本軍が侵略したとき、オーストラリアにいて、臨時政府の首班）といったカリスマ的な資質をもった人間らしい。日本人は国外に出ると、一国の代表、使節でもあるから、旅の恥はかきすて的なみっともない行動はとれない。どんな宣伝も、一人のりっぱな人間の存在には及ばない。フィリピン人は、頼れる人間を求める傾向があるらしい。

いま日本国民は、新しい環境に置かれているという。だから日本人は利己主義をすて、国家が一つの家であるといった考えに立ち、創意と工夫によって新しい人間となり、じぶんを取り巻く状況に対処せねばならぬという。

**「比島の教育」（昭和18・7『教育』）**は、外国書（史書、旅行案内記）によって、フィリピンの教育史を瞥見したものである。およそ三部構成になっていて、

(一) スペイン統治時代の教育
(二) スペイン式、アメリカ式の教育の特徴
(三) 日本の軍政下における教育

などについて述べている。スペイン人がやって来るまえのフィリピンの教育については、十分な資料がないからわからぬらしい。

スペイン時代の教育は、宣教師が、初等教育において、よみ書きや音楽をおしえ、上級クラスではスペイン語を教えた。スペインの教育の特徴のひとつは、高等教育を重んじ、それに力をそそいだことである。そのために各種の大学や師範学校など、上級学校を百以上もつくり、そこで宗教的、人文主義的な教育をおこなったことである。

一方、アメリカの教育は、じっさい的かつ唯物的であり、初等教育を重視し、小学校（7年制）にはじまり、中等学校（4年制）、師範学校、専門学校、大学をつくった。教育はすべて英語をもっておこなった。高等教育機関のほとんどが首都のマニラに集中し、私立学校が多いのである。

太平洋戦争がはじまり、日本軍が侵攻してきたとき、フィリピンの学校のすべては閉鎖された。が、日本の軍政監部は、治安の回復とともに学校を再開させた。日本の軍政は、小学校から大学まで、日本語を必修とし、とくに初等教育に力をそそいだ。三木によると、当面、フィリピンにおいて重要なのは、日本語教育・技術教育・思想教育だという。

**「比律賓（フィリピン）文化の性格」（昭和18・11『国際文化』）**は、西洋文献を参照し、そこにじぶんの管見をくわえて成ったフィリピンの文化史とでもいえ

そうな論文である。三木にとって問題になるのは、文化の内容というよりその性格（特有の性質）であった。かれがフィリピンの文化について考えるとき、まず注意をむけたのは、この群島の社会の特質であった。

フィリピンは、一つの社会ではなく、どちらかといえば複合社会とでもいえそうな国なのである。この群島は、多くの部族、多くの方言をもっている。大多数のフィリピン人はキリスト教化されており、長いあいだ西洋文化の影響をうけてきた。が、当面の問題は、かれらに東洋人であることを自覚させ、大東亜共栄圏の一環として新しい文化をつくらせることだという。三木のみるところ、フィリピンには固有の文化はないのである。

かれはフィリピン文化の時代を四つにわけた。

第一期……古代の東洋的な固有文化の時代。
第二期……スペイン的、宗教的文化の時代。
第三期……フィリピン革命にいたる前の約$\frac{1}{4}$世紀の時代。
第四期……アメリカの侵略とともに始まり、アメリカふうの時代。

第一期の文化は、スペインの侵略がはじまる以前のものであり、中国やインドやアラビアの影響をうけ、それがフィリピン人の音楽・ダンス・劇などに現れたばかりか、アルファベット（十七文字）をもっていた。第二期の文化は、スペインの宣教師によって教育された職人や芸術家らが、教会や修道院の建築にしたがい、同時に建物の装飾として――木彫や聖人像、宗教画、肖像画などの製作をおこなった。またスペインの影響は、タガログ文字の詩形、原住民の劇、音楽や舞踊にも材料を提供した。

第三期の文化は、スペインの影響や模倣をはなれ、国民主義や愛国心がさかんになり、フィリピンの独自性を発揮しようとした時期である。それは政治文学や宣伝文学、土語による文学にあらわれる。第四期の文化は、アメリカのものを真似た時期であり、その物質的文化――自動車、電気冷蔵庫、ミシン、卑俗な小説や短編、安価な娯楽雑誌、ホテル、官庁、学校、ジャズ、ダンス、映画、演劇、バクチ、野球――などが、フィリピン人の生活のなかに入ってきて、やがてその精神にまで浸透し、かれらの享楽的傾向を助長した。

三木によると、大東亜戦争がはじまったことにより、フィリピン文化は第五期に入ったという。それはまったく新しい時代のはじまりを意味し、フィリピンは日本を指導者としつつ、その文化はあらゆる面において変貌しつつあるという。

**「比島人（フィリピン人）の政治的性格」（昭和18年執筆？、著者の原稿）**は、未刊におわったものか。これはフィリピン人の〝話しずき〟や政治論ごのみについてのべたエッセイの感がある。フィリピンの田舎にいくと、たいてい町の中央に市場があって、つねに大勢の人がいる。フィリピン人はおしゃべりが好きであり、いつまでもしゃべっている。おまけになかなか理くつぽいという。ことに政治について議論することを好むという。

三木は何度も原住民のまえで、通訳つきで話（講話？）をしたが、そのあといつも自由に質問させたという。そのとき出た問は、日本はフィリピンの〝独立〟をどうするのかということであった。独立はすでにアメリカによって認められており、いままた日本によっても認められている。独立はフィリピン人にとって、〝一種の信仰の対象〟になっているように思えたという。

三木によると、政治的独立の実質的な基礎をなすものは、経済とか文化であるが、フィリピン人は反省することなく、ただアメリカにつき従ってきただけであった。フィリピンにおける諸関係を支配しているのは、かしらと仰ぐ親分と子分の関係であり、理くつは形式的なものであり、〝人間〟がむしろすべてという。

これら九篇の大小の論文は、雑誌や新聞のために書いた依頼記事であったであろう。執筆した時期は、帰国した翌年（昭和十八年［一九四三］）に集中している。この年戦局は悪化し、ガダルカナルの日本軍は撤退し（2月）、アッツ島の日本軍が全滅した（5月）。学生の動員計画がきまり（6月）、学徒出陣式がおこなわれ（10月）、徴兵年齢を一年下げて十九歳とされた（12月）。

一方、ヨーロッパにおいては、ドイツ軍がスターリングラードで敗退し（2月）、枢軸国のひとつイタリアが降伏した（9月）。

**三木がマニラから持ち帰った書物。**

三木は、欧米やフィリピンの学者が著わした先の研究書をマニラの図書館で目にしたものであろう。ほかにかれがマニラから秘かに持ち帰ったフィリピン関連の書に、つぎのようなものがある（三木文庫蔵）。

Conrado Benitez 著　History of the Philippines, Economic, Social, Political, Ginn and Co., Boston, New York etc, 1929
（作家コンラド・ベニテスが著わした教科書的な『フィリピン史』一九二九刊。これには軍政部の検閲印がついている。）

Leandro H. Fernández 著　A Brief History of the Philippines, Ginn and Co., Boston, New York etc, 1932
（フィリピン大学教授レアンドロ・H・フェルナンデスが著わした教科書的な『フィリピン小史』一九三二年刊。本書は中等学校用に執筆した、フィリピン史への入門書）

Sofronio G. Calderón 著　Tagalog-English Vocabulary and Manual of Conversation, M. Colcol & Co., Manila, 1939
（ソフロニオ・G・カルデロンが著わした『タガログ語＝英語語い集。会話便覧』一九三九年刊）

Eufronio M. Alip 著　Philippine History, Political, Social, Economic, R. P. Garcia Publishing Co., Manila, 1940
（エウフロエオ・M・アリプ教授が著わした中等学校用の『フィリピン史』一九四〇年刊。これには軍政部の検閲印がついている。）

Florence Horn 著　Orphans of the Pacific, the Philippines, Roynal & Hitchcock, New York, 1941
（フロレンス・ホーンが著わした『太平洋の孤児たち』一九四一年刊。これには軍政部の検閲印がついている。）

中屋建弌（なかやけんいち）著『フィリッピン』（興亜書房、昭和17・3）は、三木がマニラに到着したころ、内地において刊行されたマニラ見聞記である。著者は同盟通信社のマニラ支局長として、またマニラ常駐の日本人新聞記者として、二年ほど太平洋戦争直前にこの市に勤務した。そのとき見聞した事実を基礎とし、フィリピン人の真のすがたを紹介しようとしたものという（「あとがき」）。

同書には「章」はないが、大きな項目だけをかかげると、つぎのようになる。

東洋の真珠*――フィリッピン人の性格――ケソン大統領とデモクラシー――経済的独立への苦悶――フィリッピン人の生態――フィリピン点描――大東亜戦争とフィリッピン――あとがき

*フィリピン人が自国のことをこののように呼んだもの。

三木が先の論文において描いたのは、フィリピン人の中にみられる〝東洋的性格〟である。が、一方中屋は自著において、フィリピン人に特有の性質について語っている。一言いうと、フィリピン人の性格は、「東洋人にして、東洋的でない、ということに尽きるという」（「見栄坊なフィリッピン人」）。

中屋はフィリピン人の生活の根底にあるのは、カトリック教の影響による〝形式主義〟（外形をつくろい整えようとする態度）と安価なアメリカニズムの所産である〝個人主義〟（俗に利己主義）であるという。フィリピン人は破れんちなことをやっても、日曜日の礼拝のとき、僧侶にざんげすれば、神の許しがえられる、と考える。このような風潮はかれらの生活の中に浸み込んでいるという。

マニラ生活において、フィリピン人の恥ずべき行為を実地に見聞した著者は、これでも日本人とおなじ東洋民族であろうかと、わが眼をうたがうことがたびたびあった。著者が、フィリピン人の性格として掲げているのはつぎの点である（「目次」より）。

見栄坊なフィリピン人……フィリピン人は、住居や食物にはあまり金をかけないが、他人の目につきやすい、衣服には金をかける。ふだん着にはよく洗たくした物を身につけているが、祭や教会へ出かけるときは、クツをはき、ネクタイをつけ、出来るだけよい服を着る。つまりうわべを飾ろうとする（見栄張りという）。

ウソつきが天性……フィリピン人が、すぐバレるようなウソを平気でつくことは世界的に有名だという。かれらはウソがバレても恥しいとはおもわぬらしい。商売をやっても大成しないのは、信用性に欠けるからという。

そのくせ、他人をいい負かすことに喜びをみいだし、訴訟をおこすことが好きである。

読書せぬ文化人……マニラ市には、本屋はわずか一軒しかないという（じっさいは二軒ほどか――宮永）。なぜなら、フィリピン人はほとんど堅い本をよまぬからである（暑い気候のせいか――宮永）。かれらの知識の出所は、新聞・雑誌・ラジオ・映画などである。いちばんよむのは、新聞である。それには英字紙、スペイン語紙、タガログ語紙など、計七紙がある。

かれらは新聞記事やラジオ放送の内容を鵜のみにし、信じ込む。

働くことがいやな使用人気質……本をよまず、物ごとについて考えず、働かずして食うことばかりを考えているのが、フィリピン人という。こそドロ、幼稚なサギを気にしては、マニラで人を雇えぬという。女中を市場に買物にやると、かならずごまかしてくる。（ツリ銭サギのことか――宮永）。それをやかましく言うと、家の中の目ぼしいものをかっぱらって、さっさと出ていってしまう。

雇われ人が欲しいのは、一にも金、二にも金なのである。だから一ペソでも給金のよい家があると、さっさとそこに鞍がえし、エプロンを返しにくる。

フィリピンで暮らすと、毎日汗をかゝぬ日はないから、どこの家でも洗たくを専門にする女中をやとっている。給金は月に八～一〇ペソと安い。しかし、彼女らは洗たくものを実にきれいに仕上げる。

自動車の運転手をやとうと、月に四〇～五〇ペソかかるという。しかし、中には車のガソリンをゴム管で吸いだして売るやからもいる。ある日本人がそのインチキぶりに気づき、運転手を首にしたら、その者はエンジンに砂をぶっかけ、使用不能にして出ていった。

フィリピン人がもっとも軽蔑し、きらう仕事は肉体労働である。道路工事や土木工場にたずさわる者は、たいてい囚人である。フィリピン人は、ヤシやバナナを食べてがんばるつもりなら、よほどのことがないかぎり、働きたくな

く、また多少の賃金など問題ではないという。

中屋は、フィリピン人の生活のようす――暮らしぶりの特徴について、つぎのような項目を掲げている（「目次」）。いわばそれはかれらに特有の性質であり、三木が論文の中で描いたものと合致するものもある。

女天下……フィリピンは、女天下の国という。いわゆる西洋でいうLadiès first（女性を尊重し、優先させる習慣）の国ということであろう――宮永。雑とうする道路であっても、女性は信号を無視し、平気に渡ってゆく。交通巡査はどなるどころか、相手が年よりなら、手をとって渡してやる。郵便局や役所へいっても、女性は順番を優先される。一にも二にも、女性優位の国がフィリピンである。

（三木は女尊男卑の風潮があることを見てとっている）。

ダンス・闘鶏（とうけい）（ニワトリを……フィリピン人は、上流から下層階級に至るまで、飯よりもダンスが大好きである。人があつまればダンスがはじまる。戦わせる遊び）・競馬など　また音楽をも好む。けあい（闘鶏）や競馬をこのむほか、賭けごとというとほとんど目がない。玉つき、しょうぎ、玉ころがし、吹矢、ボクシングなど。

住居と食物……ふつうのフィリピン人の住居は、ニッパ・ハウス、Nipa houseと呼ばれるものである。それはニッパヤシの葉で屋根をふいた、高床式の家である。階段を昇ってゆくと、扉はなく、壁や床は竹または木でできている。食物は米を常食とし、魚や鶏を油でいためたものやバナナなどで満足する。

米はバナナの葉でつつみ、三本の指を使ってたべる（下層のフィリピン人の昼食）。いちばんのごちそうは、ブタの丸焼きや鶏を油であげた料理である。

## むすび

わが国が太平洋戦争に突入するころから、国粋的傾向をもつ皇道哲学者とはべつに、京都学派の哲学者（西田幾多郎、田辺　元、三木　清など）は、時局に迎合するかのように、超国家主義や侵略戦争の片棒をかつぐような論文を発表した。三木は徴用でフィリピンにいくまえに、「戦

時認識の基調」（『中央公論』昭和17・1）を発表した。かれはこの中で太平洋戦争を肯定し、戦争への協力を唱導し、不敗必勝の信念をかため、皇軍（日本軍）のめざましい活躍に呼応せねばならぬ、といった。しかし、この論文は軍部の不興をかったばかりか、右翼から非難攻撃をうけた。

自由主義者、マルクス主義哲学者と目された三木そのひとは、このような記事をかくほど純粋な国家主義者、愛国者であったのか。人は表現された文字をみて、書き手の考えや思想傾向を判断するのがふつうである。時あたかも、文士の書いたものを目を皿のようにしてみつめ、その瑕（か）しをみつけ、糾弾しようとする、右翼勢力がばっこしていた。そればかりか表現や思想内容を調べる検閲制度があったから、ものを書く側も、それにひっかからぬように、じゅうぶん注意を払う必要があった。

三木には二面性――表むきの顔と裏むきの顔とがあったようだ。かれはいわば二重人格者であった。新聞雑誌むきには、軍国主義に左袒（さたん）（味方する）ようなことを平気で書いたが、それは本音ではなく、じっさいは心にもないことをいっていたのである。一方、実生活においては、酒が入っても入らなくても、ところかまわず軍部の悪口雑言を平気でいうくせがあった。

阿部知二（ともじ）（一九〇三～七三、昭和期の小説家・評論家）は、何かの雑誌の座談会の帰り、三木と二人で、省線の駅へむかって歩いていた。街はかなり人で込んでいた。かれは酔っていたが、何かのはずみで戦争のことが話題になった。そのときのことである。三木は急にあたりかまわず、大きな声で、

――聖戦、*聖戦――そういう狂（きょう）じみたことをいうだけで、日本は負（ま）ける。

といった。阿部は三木の二の句をとどめるために、あわてて

――だが二木（ママ）さん。いつの時代のどこの国だって、戦争は聖戦といいます。

と思わずいった。

――ふふん、だから戦争は……。

と三木は声を低めていいかけると、話を中断した（阿部知二「創作　思出（おもいで）」『世界』第71号所収、昭和26・11）。

三木が嫌悪したものは、軍部と戦争、日本に言論の自由がないことであった。かれは日本の国策の肩をもつような評論をいろいろ新聞雑誌に書

＊神聖な戦争。正義を守るための戦争の意。

いたが、それはうわべだけのものであり、本当の気持を伝えたものではなかった。半面の真理を語ったにすぎなかった。かれの心底を見とどけることはできないが、知人の談話を綜合すると、終始軍部と軍国主義、戦争に反対する考えをもっていたようである。

〝徴用〟の名のもとに大勢の文化人（作家、絵描き、新聞・雑誌記者、映画・放送関係者、産業技術者、宗教人（司教）、娯楽用の慰問団など）が南方に遣られ文化工作（日本の宣伝戦、思想戦）に従事した。が、中でも三木のように評論を業とする人間の中には、これは徴用ではなく、人をこらしめるためのもの――懲罰的な〝人間狩り〟と考える者も少なからずいたようだ。三木はそのような疑心にとりつかれていた一人であったと思われる。情報局が考えだしたとされる徴用に、ドイツの監獄的な思想（制裁的な意図）をはっきりと感じとったのは、三木が徴用にかかったニュースをジャワ（インドネシア）に渡ってから聞いた阿部知二であった（「創作　思　出」）。

戦争は、国民がそれをのぞむとのぞまないとに係わらず、ある日突然はじまる。大東亜戦争（太平洋戦争）は、わが国にとって、未ぞうの大事件であった。なぜこのような大戦争がはじまったのか。またどのような戦争計画にもとづいて、それが実行されたのか。

資源をもたぬ日本は、昭和十六年（一九四一）七月、南部仏印（サイゴン）への進駐を開始すると、アメリカは警告どおり、在米日本資産を凍結した（7・25）。つづいて石油の輸出も停止した（8・1）。蘭印（オランダ東インド）、イギリス、中国もアメリカにならい日本資産を凍結した（ABCD包囲陣）。御前会議において、「帝国国策遂行要領」が採択され、十月下旬を期してアメリカ、イギリス、オランダとの開戦を準備した（9・6）。一方、ワシントンにおける戦争回避のための日米交渉は、進展せず、アメリカが中国・仏印からの日本軍の撤兵をもとめる強硬案（ハル・ノート）を示したために、万策つきた日本は自存自衛のためについに開戦にふみきった（12・8）。

南方への戦略は、資源（石油）を獲得するのが目的であった。太平洋戦争の主因の一つは、石油問題であった（海軍元帥・永野修身（おさみ））。わが国は原料および天然資源を、国内や満州、中国だけから入手することができなかったから、しぜん南方に目がむいた。日本軍は緒戦において順調に勝利し、開戦半年後に外廓（防衛）線を設定できるまでになった（北はアリューシャン列島のキスカ、アスカから、南はミッドウェー、ギルバート、ソロモン諸島まで）。しかし、日本の陸海軍は、ふじゅう分な兵力をもって不相応に前線を拡大したために、結果においてそれを維持できず敗退した。つまり、国力を無視した作戦をおこない、手をひろげすぎたのである（海軍大将・野村吉三郎（きちさぶろう）談）。

注・米国戦略爆撃調査団『証言記録　太平洋戦争史』、一〇一頁。

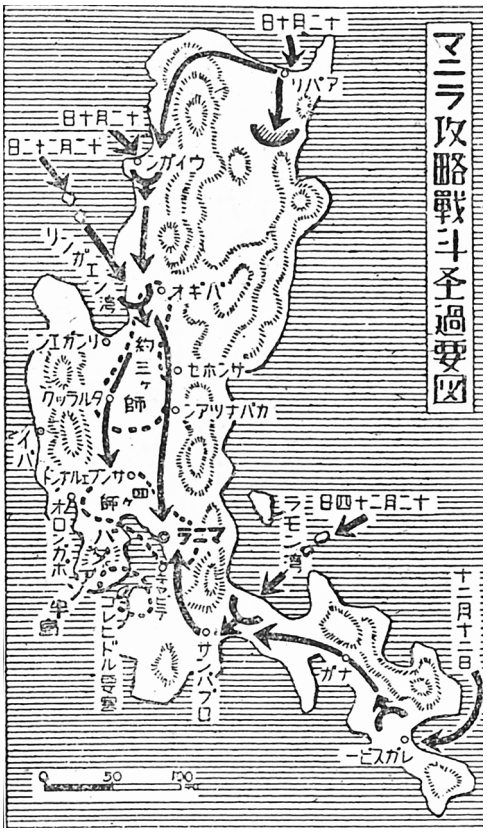
フィリピンをめぐる戦略は、昭和十六年（一九四一）十二月八日――航空部隊による攻撃と陸海軍の先遣部隊によって比島の数地点に上陸を敢行することによってはじまった。本間雅晴（まさはる）中将の指揮する第十四軍は、ルソン島西岸のリンガエン湾に、また一部は東岸のラモン湾に上陸した（12・22～24）。さらに北と南から進攻した日本軍は、相呼応しつつマニラをめざして進撃をつづけ、昭和十七年（一九四二）一月二日ついに首都を占領した（『比島攻略作戦』防衛庁防衛研修所）。

石油が出ないフィリピンに対する作戦目的は、敵を主要拠点において撃破し、そこを占領したのち、航空基地を整備することにあった。

**軍政下のマニラ地図。**

三木が十ヵ月ほど滞在した当時のマニラの市勢はどうであったのか。その地理的な特徴について記してみたい。

その位置は、北緯14°36′、東経120°58′である。昭和十四年（一九三九）当時の人口は約六二万三〇〇〇人。市はパシグ川をはさんで南北にある。河口ちかくにあるのは、Intramuro とか Walled City と呼ばれる旧市街である。市の陸地面積は20平方マイル。住民の構成はつぎのようになっていた。




日本軍によるマニラ攻略図。『大東亜戦争史』昭和17・6より。

土着の住民（タガログ族）67％　中国人と土民との混血（メスティサ）17％　中国人13％
アメリカ人2％　日本人0.5％　その他土民とスペイン人の混血（メスティサ）

マニラは地震や台風が多く、地盤は軟弱であるため、宏壮な建物はすくなかった。市内にはトタンやニッパヤシの葉でふいた家がかなりあり、トイレはなかった。街中に縦横に小運河や入江がもうけてあるが、沼よりあふれた腐敗水はつねに悪臭をはなち、また排水の便も不完全であった。フィリピン人はお湯に入らず、水を浴びるだけである。

大きな商いは中国人とアメリカ人、スペイン人との混血がにぎり、土着民は小売をなすだけであり、邦人は目抜き通りでバザー（安売店）を設け、雑貨販売をおこなっていた。その数は、約四七〇〇人。市内のタクシーの数は、約一万九六〇〇台（一九三八年）。ほかに一頭立ての馬車約二〇〇〇台のほか、牛車もあった。日本軍が進駐するまで、フィリピン群島はアメリカ領であり、独立の準備ちゅうであった（中屋建弌『フィリピン』と『太南洋地名辞典　第一巻』丸善株式会社、昭和17・1を参照）。

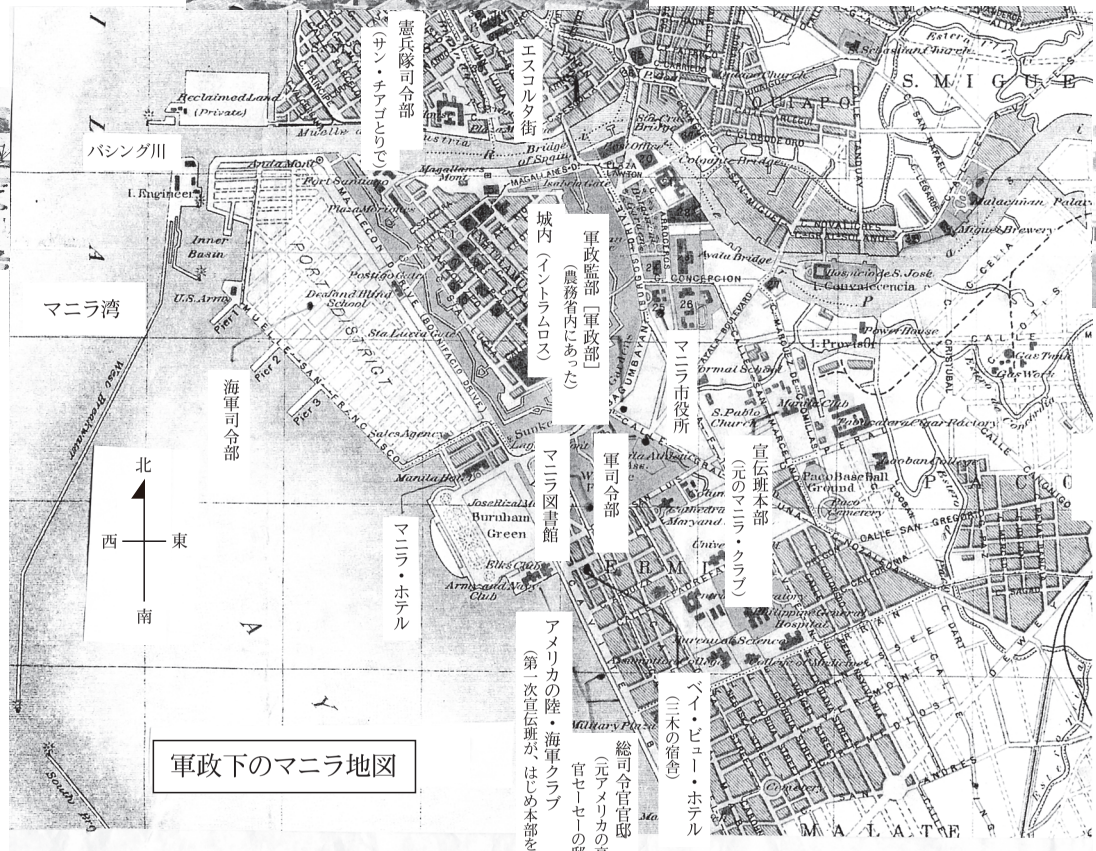
「オープン・シティ」（無防備都市）――マニラに入京した第十四軍（約三万四九〇〇人）の総司令官・本間雅晴は、昭和十七年一月三日、軍政（占領地において軍がおこなう行政）を宣言し、「布告」「告知」を提示し、政党や市民団体を解散させ、過酷な制限を住民にくわえた。――灯火管制、夜間の外出禁止、ラジオの使用禁止、銀行、学校、教会、工場、印刷場、新聞社、劇場などを軍の監督下においた。またフィリピン国旗をかかげたり、国歌やアメリカの歌などを歌うことも禁じた。貨幣（米ドル、フィリピン通貨）に代わって「日本軍票」（手形）が使われた。

日本軍はマニラ市内および近郊に検問所をもうけ、そこで住民を監視した。ことに憲兵の傲慢さは民衆の反感をよんだ。随所でかれらにおじぎをしなかったり、質問に答えられぬと、そのほおをやたらと平手打ちにした（ビンタをはった）。軍政は資源を獲得するために、日本企業に鉱山の開発にあたらせたり、サトウキビ畑を綿畑に切りかえさせた。綿は軍服や医療用に必要であった。マニラでは食糧事情が悪化し、空いた土地を菜園とすることを勧めた。

一月二十二日、マニラ市長ホルヘ・B・バルガスは、行政組織をつくるよう命じられ、やがてフィリピン行政委員会（六名で構成）が発足した。これは軍政当局に指導された「かいらい政権」であった。占領軍は治安の回復を重視し、「警察官訓練所」をもうけ、約二万名の現地人を養成し

バシング川の図。
『南洋地理大系　2』ダイヤモンド社，昭和17・6より。

マニラ湾の図
『比島日記』中山書店，昭和18・12より。



左側の建物が「軍政監部」。

注・軍政下のマニラの地図はすくなく、役立つものはほとんどない。唯一の有益な地図は、興田正人氏（衛生軍曹）が作成した「マニラ、思い出の街の地図」「集録『ルソン』第35号」所収（平成3・3・3）であった。ここに芳名をしるし謝意を表す。

た。また「教員訓練所」「日本語専門学校」などをつくったが、日本語教育はあまり成果をあげなかった。

軍政当局の命令をつたえたり、不審人物（ゲリラ）を捕えるために「隣組」をつくったり、「カリバピ」（日本の大政翼賛会に似た新生フィリピン奉仕団）を設立させた。ゲリラはフィリピンの日本軍を悩ませた。戦争末期になると、それに抵抗するために、住民に〝竹槍隊〟や親日の義勇軍「マカピリ」（フィリピン愛国同志会）を創設した。

一九四四年（昭和19）十月二十日――六五〇隻以上の艦艇に分乗したアメリカ軍四個師団は、レイテに上陸した。ルソン島の日本軍（約二七万人）は、空に陸に海にはげしく抵抗したが、フィリピン方面軍司令官・山下奉文（ともゆき）大将は、軍を北部と中西部、南部（マニラ東方）のジャングルに撤退させた。が、その途次、日本軍は町や村を焼き、民家をおそい、米・トリ・水馬・馬などをうばい、ときに住民を虐殺した。

山下の徴収命令にさからい、マニラ市にふみとどまったのは、岩淵三次少将が指揮するマニラ海軍防衛隊（約二万名）である。絶望的な戦況下にあるこの一軍は、一九四五年（昭和20）二月三日から、約一ヵ月市内にたてこもり、米軍と攻防をくりかえした。が、やがて南北から進撃する米軍に、袋のネズミとなり、パコ、エルミタ地区や旧城内で手当たりしだいに建物に火をつけたり、殺人、陵辱をおこなった。その結果、マニラ市は廃きょと化し、約一〇万の民間人が亡くなったという（『写真図説　日本の侵略』大月書店、平成4・12）。

## 大阪毎日新聞の特派員・木村　毅（き）の マニラ報告。

三木がちょうどマニラにやって来て、退院したころ、木村　毅（一八九四～一九七九、大正・昭和期の評論家・明治文化研究家。大阪毎日、東京日々の社友。のち東京都参与）は、大阪毎日新聞の特派員としてこの旧都にやってきた。まだ日米戦がさかんなころであり、日本機がバターンやコレヒドールでおとす爆弾の煙柱が、マニラの海岸からよく見えるころである。木村の来比の目的は、

一　大阪毎日に記事を書いて送ること。
二　フィリピンに関する小説の材料をあつめること。
三　日比交渉史の資料をあつめること。

などであった。かれは神戸から船にのり、瀬戸内海を航し、九州に着くと、そこから飛行機で台湾へ飛び、当地からまた機をのりかえ、昭和十七年三月二十日マニラに到着した。その日から五日ほどぜいたくな「マニラ・ホテル」に泊まった。のち繁華街の中心にある「アヴェニュー・ホテル」に移り、そこに二週間いて、さらに「ペラルタ・アパートメント」（放送班の宿）に移動し、五月初旬に帰国するまで一ヵ月ほどすごした。

木村は当時マニラにいた宣伝（報道）班員のくらしぶりなどについて貴重な証言を残している。が、残念ながら三木の名は出てこない。おそらく会う機会がなかったからであろう。マニラ・ホテルに泊ったとき、そこからは旧市街（旧城内）が近いので、いちばん喜んだ。そこはキリシタン大名の高山右近や日本人信徒らの終えんの地であったからである。

マニラ・ホテル
Alip著　Philippine Historyより。

マニラ・ホテル（一五〇室）やアヴェニュー・ホテルは、どちらも日本軍に接収され、日本人が経営していた。将官佐官クラスは、マニラ・ホテルへ、尉官クラスは、アヴェニュー・ホテルに泊まることになっていた。ルネタの草原のむこうに、市庁・図書館・農商務省その他の官公の建物がみえたという。軍政監部（軍政部）は、新築の農商務省の建物のなかにあった。

徴用文士らの宿泊所であった、「ベイ・ビュー・ホテル」は、エルミタという住宅街とホテル街にあったという（住所はエルミターアルハンブラ一〇五番地）。マニラに着いて二、三日すると、「トリビューン」社から電話がかゝり、インタビューを申し込まれた。記者から来比の目的をきかれ、それに答え、大東亜共栄圏を建設するための戦いに、全アジアの民衆が協力する必要があることを説いた。インタビュー記事は『トリビューン』紙の朝刊（3・25付）にのった。

新聞にインタビュー記事がのった翌日（3・26）、木村は「宣伝班本部」が置かれているイギリス人の「マニラ・クラブ」（パコー地区のサン・メルセリノにある「イギリス・クラブ」English Club のことか）で、

火野葦平
上田　広　注・この二人は、バターンから連絡のために、マニラに来、夕方のバスで前線に帰った。両人はバターン陥落までマニラに帰らなかったらしい。

石坂洋次郎　木村は、石坂の妻と母堂から、手紙とお守りをあずかってきた。

ら三人と会った。そこは広い庭に堂々とした建物があるクラブで、二階は寝室になっており、バー、ビリヤード室、ボーリング室、図書館などもあった。

火野も上田も、兵隊あがりだから、歩き方からして板についていた。その後、木村はこの二人の、また柴田賢次郎のうわさをたびたびきいた。

## 木村がみたフィリピンにおける文化工作。

かれは独自の立場から、みずから見聞したフィリピンにおける日本軍の文化政策（宣伝活動）について語っている。当地において、じっさい行われた文化政策は、つぎのようなものという。

一　ラジオ……木村によると、宣伝にいちばん効果があるのは、ラジオだろうという。マニラ市において、米軍がこわしていった設備を手に入れ、一月十四日から現地人を使って放送を開始した。かっての放送は、ニュースと享楽（歌や劇）を提供する機関であったが、軍政がはじまると、文化講演も加味された。

日本の歌謡「さくら、さくら」「荒城の月」「愛国行進曲」なども放送された。

二　レビュー（小喜劇「ダンス、歌などを組み合わせたもの」）……裏街でくらす落魄（らくはく）のイタリア人を起用し、レビューガールをあつめ一座を組織し、日本の歌謡入りの喜劇を演じさせた。今　日出海がこれに関係した。

三　映画……マニラには映画館が多いが、そこで上演しているものはアメリカのものばかりで、日本のものは一つもないという（木村）。

四　新聞……フィリピン人は本をあまりよまぬが、新聞はよくよむ。新聞による宣伝工作は、大きな効果をもっているという（中屋建弌『フィリピン』、四五頁）。

五　教科書の決定……六月一日から、マニラの小学校において、日本語教育がはじまった（木村）。

六　宗教……ローマ法王庁に、日本から大使を派遣することがきまると、日本人神父の放送があった。

**三木　清の偽装術。**

さて、マニラにおける三木のことである。

かれは徴用班員として、この市で何の仕事をやり、どのように暮していたのであろうか。これらの問に答えるまえに、かれの宿舎であった「ベイ・ヴュー・ホテル」から語ってみよう。

このホテルは、「宣伝班本部」から歩いて七、八分のところにあり、エルミタ地区にあるマニラ・ホテルにつぐ、第二の大きなホテルであった（佐藤勝造「三木さんの放送原稿」）。それは九階建ての大きな建物であり、三木の部屋は五階にあった。ベイ・ビュー・ホテルに泊っていたのは、軍政部員、報道班員など三百人であったという（木村　毅著『マニラ紀行　南の真球』、二五二頁）。

しかし、じっさい人の出入りもあるから、宿泊数は一定していないが、いつも二百人分の食事を用意していた。けれど前線にいく者、ホテルで飯をくわない者もいて、それでも余った。

三木は退院後、じぶんの部屋ですごすことが多く、報道部の仲間ととくに親しくつきあうことはなかった。暑い現地においても、東京を出発したときのままの冬仕度のままであった。バターン戦たけなわのころ、文士・新聞記者・写真家・画家らは前線に出かけ戦場生活を体験したが、三木はじぶんから進んで前線に出かけようとはしなかった。あるとき、だれかが三木さんもバターンの前線に行ってこられたらどうですか、というと、「私は戦争にきたのではない。フィリピンの文化の研究にきたのだ。戦争なぞに興味はない」ときっぱりいったらしい。

この発言は論議をよび、他の報道班員のいかりを買い、その真意をたしかめにある者が三木の部屋に押しかけた。が、当人はドァにカギをかけて取りあわなかった。報道部としても何らかのしめしをつけねばならなくなり、軍命令で、二週間ほどバターン前線にやられた。

三月下旬（バターン総攻撃寸前）……クラークフィールド飛行場（マニラの北西七七キロ）を訪れ、数日すごした。

四月九日……バランガ（ルソン島南西部、バターン州の州都。マニラの南西五〇キロ）。

〃　十一日……南端マリペレスの奥地。

五月七日以降……コレヒドール陥落後、訪問。

三木は出勤免除組のひとりであったらしく、あまり宣伝班本部に顔を出さず、マニラではできるだけ図書館（Manila Library のことか）でくらした、と帰国後、小林　勇に語った。図書館でフィリピンの文物に関する書物を借りだし、それをよみながら、必要な箇所を大判のノートに書き写し、抜き書きをつくった。桝田啓三郎によると、ノートは十冊ほどあったらしいが、現在行方不明である。おそらく当局の手入れがあったとき、没収され、そのまゝになったものであろう。

三木がフィリピン研究に没頭したのは、日本を立つまえに国民学術協会（中央公論社内）からフィリピンや南方に関する研究を委嘱されたからであろう。

公的な仕事として、（第十四軍）司令官が出す「布告」の代筆――官吏養成所・捕虜収容所における宣撫・対敵宣伝のための講話、日本語の教科書づくり（?）、ラジオ放送（「日本の歴史的立場」昭和17・4・3）などをやったようである。

三木は昭和十七年十二月、マニラから帰国した。内地に帰ったかれは軍人のバカさかげん、ふまじめさ、徴用された文士たちのでたらめさなどについての悪口を小林に聞かせた。

戦時下、定期的な収入のない文士は、ペンで食べてゆくことが容易ではなく、依頼原稿があれば、編集部の意にそうようなものを書いて稿料をもらい生活していた。文筆家にとって生きること自体がむずかしい時代であった。かれらはじぶんの思想や信条をまげてまでも大勢に順応して生きるしかなかった。

「仮面」とは、本心をかくし、別なものにみせかける意であるが、売文の徒――三木　清は、戦争中、国家主義者、時局迎合者の仮面をかぶって執筆活動をつづけた奇人であった。反軍思想にこりかたまっていたかれは、ジャーナリズム界において、本性（ほんしょう）をかくし、別人をよそおい、大勢よりのものを書いた。かれには何ら恥じらいはなかった。あるいみで、三木は阿諛曲学（あゆきょくがく）の徒であった。矛（ほこ）と盾（たて）とをいっしょに売り込む武器商人のようでもあった。裏とおもてのある二重人格者であったといえる。ここにかれの人間的特徴がある。……

いまの時代、生前の三木を知るひとは、もう数えるほどしかいないだろう。当然、筆者は生身の三木を知らないが、弟・繁氏（しげる）のことはあるてい

どよく知っている。その風貌は写真でみる兄・清のそれを想いださせるのに十分である。清は話に夢中になると、口からあわを飛ばすようにものを言ったらしいが、繁氏は口ごもるように話をした。いま折にふれ耳にした清のエピソードが想い出される。教師・繁氏が、兄のあとを追い、あの世に旅立って年ひさしい……。

おもなる参考文献


今　日出海『新日本文学全集　第24巻　上田広 日比野士郎』改造社、昭和18・3。
「三木清における人間の研究」『文藝　増刊号』所収、昭和21・10。

今　日出海著『小説集　人間の研究』新潮社、昭和26・5。
注・この中に「三木　清における人間の研究」を再録。

阿部知二「創作　思　出」『世界』第71号所収、昭和26・11。
注・この中に、三木武（三木　清のこと）が登場する。

米国戦略爆撃調査団『証言記録 太平洋戦争史　戦争指導篇　大井篤 冨永謙吾 訳編』日本出版協同株式会社、昭和29・2。

中島健蔵著『昭和時代』岩波書店、昭和32・5。
『三木　清全集』第6巻、第13巻、第14巻、第15巻、第18巻、第20巻――昭和36～同61刊行。
注・第20巻の「月報」に、「三木さんの放送原稿（佐藤勝造）」を収録。渡比まえの三木、ベイ・ビュー・ホテル、宣伝班本部などについての貴重な情報を含む記事。

防衛庁防衛研修所戦史室 著『比島攻略作戦』朝雲新聞社、昭和41・10。

『尾崎士郎全集　第12巻』講談社、昭和41・11。
注・この中に「小説四十六年」を収録。

『昭和史の天皇　11』読売新聞社、昭和45・7。
注・この中に「思想工作、から回り」や軍司令官の代書屋のようなことをやっていた三木　清のことが出てくる。

グレゴリオ・F・サイデ著 松林達良訳『フィリピンの歴史』時事通信社、昭和48・9。

『小林　勇文集　第一巻』筑摩書房、昭和57・11。

注・この中に「孤独のひと――三木　清の一周忌に」「三木　清を憶う」などを収録。

『史料集　南方の軍政』朝雲新聞社、昭和60・5。

南方第12陸病本院教育隊　衛生軍曹　與田正人「マニラ、思い出の街の地図」「戦中マニラ市街図」『集録『ルソン』第35号所収、比島文庫、平成3・3。

注・これは軍政下のマニラを知るための貴重な記録。

『インタビュー記録　日本のフィリピン占領』龍渓書舎、平成6・8。

「旧岩崎弥之助・高輪邸」（現・三菱開東閣）『元勲・財閥の邸宅』所収、JTBパブリッシング、平成19。

平子友長「第四部　最後の三木　清――三木　清と日本のフィリピン占領」『遺産としての三木　清』所収、同時代社、平成20・3。

庄司武史著『清水幾太郎――経験　この人間的なるもの』、ミネルヴァ書房、令和4・4。

仲原善徳著『比律賓紀行』河出書房、昭和16・12。

『大南洋地名辞典　第一巻』丸善株式会社、昭和17・1。

注・この中にマニラの市勢についての記事がある（三八三～三八四頁）。

中尾建弌著『フィリッピン』興亜書房、昭和17・3。

注・当時のマニラを知るための好書。

『南洋地理大系　2』ダイヤモンド社、昭和17・6。

宮居康太郎編『大東亜戦争史』佐々木出版社、昭和17・6。

木村　毅著『マニラ紀行　南の真球』全国書房、昭和17・10。

『大東亜戦史　比島作戦』読売新聞社、昭和17・11。

比島派遣軍報道部『比島戦記』文藝春秋社、昭和18・3。

尾崎士郎著『戦影日記』小学館、昭和18・5。

注・第一次報道班員としての著者の体験をつづった貴重なもの。現地で撮った写真をも収録。

〃　『烽煙』生活社、昭和18・7。

注・報道部長・勝屋中佐の「序文」のついたもの。

『比島日記』中山書房、昭和18・12。

『比島風土記』小山書店、昭和18・12。
向井潤吉著『比島』新太陽社、昭和18・12。
柴田賢次郎著『マニラの烽火』日本文林社、昭和18・12。
大本営陸軍報道部監修『フィリピン共和国』毎日新聞社、昭和19・10。

An Official Guide to Eastern Asia vol.V East Indies, Prepared by The Imperial Government Railways of Japan, Tokyo, Japan, 1917
注・同書中にフィリピン諸島の概説、マニラ案内（位置、歴史、気候、オテル、レストラン、領事館、クラブ、観光スポットなど）についての記述があるほか、マニラ地図（1枚）そえられている。
Eufronio M. Alip 著　Philippine History, Political, Social, Economic, R. P. Garcia Publishing Co, Manila, 1940
Gregorio F. Zaide 著　Philippine Political and Cultural History Vol.II The Philippine since the British Invasion, revised ed. Philippine Education Co, Manila, 1957
Pedro A. Gagelonia 著　Pilipino Nation, Navotas Press, Manilla, 1977